古墳前期東日本における高杯状装飾器台

野村高広

要旨　本稿では古墳時代前期の東日本で盛行する「特殊な器台」と呼ばれる土器群をとりあげる。問題の土器群が東日本で出現する古墳時代初頭は、東海系・北陸系をはじめとする外来系土器が関東地方に流入してくる時期である。従来の研究では、いわゆる古墳出現前夜の日本海沿岸地域で盛行する装飾器台が「特殊な器台」、とくに「結合器台」の成立に大きく関わっているとされてきた。本稿では問題の土器群を部位の属性に着目した分類案を提示した上で、各分類のなかで装飾器台と系譜関係をもつものと、持たないものに大別する。後者の土器群については系譜関係が追い難いため、都県別の出土率を提示して分布の特徴を分析した。また、関東地方の高杯状装飾器台は墓域から出土することもあるが、住居跡からの出土例が多い点も注目されてきた。しかし、北陸・東海地方では住居跡からの出土例がきわめて少ないという違いがみられる。さいごに、古墳時代前期初頭の地域間交流について触れ、今回とりあげた土器群が関東地方で成立する背景について考察を加えた。

はじめに

東日本[1]における古墳時代前期を主体とする遺跡から、高杯形土器と器台形土器の属性を兼ね備えた土器が出土することがある（図 7 ～図 19）。その特殊な形態から高杯形土器に似て非なるものとして戦前から注目されてきた（上田 1920）。70 年代以降関東地方で問題の土器に関する集成が積極的におこなわれる一方で、北陸地方でも似ている器台形土器の報告例が増加する。資料の蓄積にともなって越前地方[2]のものに対して「装飾器台」という呼称が定着し、分類および編年に関する研究も進展（宮本 1986・楠 2003）している。

関東地方では北陸地方の装飾器台（図 1-2）との関係性についても検討がなされているが、関東地方の出土例には越前地方の資料と一括できない在地性の強いものが多数存在する。原町東遺跡（東京都文京区）の発掘調査報告書のなかで「関東地方における系譜、あるいは伝播に関する研究は十分とはいいがたく、土器編年系における時空的分析も深められていない」（新堀・山村 2004）と述べられた状況は現在も変わりない。

本稿では「結合器台」や「高杯状器台」などの様々な形式名が与えられながらも、未だに性格が明らかになっていない「特殊な器台」とされてきた土器群のなかで、盃部に中央貫通孔をもつ土器を抽出し、それを本来の「特殊な器台」と認識する。中央貫通孔をもった「特殊な器台」に限定して「高杯状装飾器台形土器」（以後、略して「高杯状装飾器台」）と呼ぶことで、「特殊な器台」全体から区別する。ただし、中央貫通孔をもたないものでも、形態が高杯状装飾器台に類似する資料を数点とりあげる。

まず「特殊な器台」に関する研究史をふりかえり、従来の研究で見落とされがちであった高杯状器台と装飾器台の間にみられる差異に注目し、東日本全域の高杯状装飾器台について部位の特徴にもとづいた分類案を提示する。そして、高杯状装飾器台の各類について系譜および地域性について分析し、さらに共伴する遺物から時期の推定される資料をもとに東日本全体の高杯状装飾器台の編年案を提示する。これを踏まえ、出土状況からみた各県・各類の特徴に言及するとともに、高杯状装飾器台が盛行する古墳前期の関東周辺における地域間交流について若干の考察をくわえる。以上の分析・考察を通して古墳出現前夜の東日本における地域間交流の一端をあきらかにすることを本稿の目的とする。

第１章　高杯状装飾器台および装飾器台に関する先行研究と問題の所在

第１節　研究史

（１）系譜および地域性について　玉口時雄は 1972 年の論文で、平原髙野遺跡の出土例と類似した高杯状装飾器台を集成した上で、出土遺跡が伊勢湾以東に集中することから東日本における古式土師器のなかの特殊な器形ととらえた（玉口 1972）。関東周辺の遺跡から出土した高杯状装飾器台は、外来系の土器と多くの研究者が考えており、その起源については大きくわけて二つの見解がある。ひとつは東海系土器に起源をもつとする説（佐原 1972・玉口 1972 ほか）であり、もうひとつは北陸系土器に起源をもつとする説（利根川 1999・楠 2003 ほか）である。

前者は、高杯状装飾器台のうち「結合器台」と呼ばれる土器群（図 1-7 ～ 1-10・12 を典型とする）を弥生時代後期に西日本で盛行する結合土器の影響を受けて成立するものと考え、「高杯状器台」（図 1-11・13・14 を典型とする）については弥生時代の伊勢湾沿岸でみられる杯部中央に貫通孔をもった高杯形土器を祖形とする。

これに対して後者は、関東地方の「結合器台」を越前地方で盛行する装飾器台（図 1-2）の系譜を引くものと考え、「高杯状器台」については装飾器台の省略形とする。後述するように、日本海沿岸地域で装飾器台が成立する背景として、これまで弥生時代後期の瀬戸内沿岸地域を中心に盛行する結合土器の影響が想定されてきたが、最近では装飾器台と結合器台の相違に注目して丹後・越前を含めた若狭湾岸地域の独自性も議論されるようになってきた。

（２）若狭湾岸地域の装飾器台について　2000 年代にはいって装飾器台の成立に関する論文（楠 2003・堀 2009）が続いて発表された。岸岡貴英は丹後地方で顕著な装飾器台（図 1-1 を典型とする）の集成を行い、これを受けて楠正勝は越前地方の資料と「丹後系装飾器台」（図 1-1）との比較を行い、弥生時代終末期前後に出現・衰退した「丹後系装飾器台」が越前地方における装飾器台（図 1-2 を典型とする）の成立に影響を及ぼしたと結論づけている（楠 2003）。

堀大介は越前地方の装飾器台を中心に研究をすすめ、器台形土器と別器種の土器が結合したものではなく、有段口縁をもつ鼓形器台の中位に、異なる器台形土器の垂下する口縁部を付属させて透

かし穴を施すことで装飾器台が成立したという新説を打ち出した（堀 2009）。装飾器台を別系統の器台形土器が結合した特殊な祭器とみる視点は、弥生時代後期に西日本で盛行する結合土器との差異を明確した点で重要である。ただし、堀の説では北陸地方の装飾器台に先行する「丹後系装飾器台」の成立を述べるにあたって若干の問題がある。

越前地方の装飾器台とは異なり、「丹後系装飾器台」では上部と下部を担っている器台形土器が同一系統のものに属している。その点を鑑みれば、器台形土器の中位に器台形土器を付属させたと考えるよりも、器台形土器の上に器台形土器をのせたとみるべきであろう。つまり、「丹後系装飾器台」は同系統の器台形土器が積み重なったものとして把握すべきだと筆者は考える。装飾器台は丹後型にせよ越前型にせよ「器台形土器をかさねたもの」として定義するのが妥当であろう。

高杯状装飾器台については、たしかに北陸地方の装飾器台の影響を受けて成立したと考えられる資料も少なくないが、装飾器台と異なる特徴をもつものが多数報告されている。関東地方周辺の高杯状装飾器台、とくに「高杯状器台」（図 1-11・13・14）の成立条件を北陸型装飾器台との関連だけにしぼって考えることには大きな問題があるといえるだろう。一方、近畿地方周辺で出土した資料でも「高杯状器台」に類似したものは、装飾器台と呼ばれる土器群から外して考えられているのが現状である（楠 2005）。したがって、関東地方において「結合器台」（図 1-3 ～ 1-10・12）の傍流とみられがちな「高杯状器台」こそ、東日本における典型とされる場合もある。

さいごに、丹後型装飾器台や越前型装飾器台を模倣したと考えられる器台形土器が東日本の遺跡からも僅かながら出土している（図 1-3 ～ 1-7）。ただし、擬凹線文を施さなかったり脚部が八の字状に広がったりするといった点で在地化する傾向がみられるため、こうした資料を本稿では「丹後系高杯状装飾器台」（図 1-3）・「越前系高杯状装飾器台」（図 1-5）と呼ぶことにする。

（３）名称について　本稿でとりあげる問題の土器群には、「高杯形器台」・「高杯状器台」・「器台結合土器」あるいは「結合器台」と言った名称が提唱されてきた（佐原 1972、玉口 1972 ほか）。こうした名称の多様さを踏まえ、熊野雅也は「特殊な器台」という総称を与えたが（熊野 1974）、熊野によって集成された土器群のなかには、当初「高杯状器台」や「結合器台」と呼ばれたものだけでなく、形態的に類似しているけれども中央貫通孔をもたない高杯形土器も多数含まれている。
1980 年代以降、北陸地方の「特殊な器台」に対して装飾器台という名称が定着した。関東地方の「特殊な器台」およびそれに類似する高杯形土器については「高杯状器台」と「結合器台」に分類して報告されてきたが、関東地方の出土例でも装飾器台として報告される場合が近年一般化しつつある。本稿では「特殊な器台」に属する東日本の出土例に関する分析・考察に主眼をおくため、「高杯状装飾器台」という総称をもちいることで若狭湾岸地域の装飾器台と区別することにする。

また、新潟県の「結合器台」と「高杯状器台」の集成をすすめた滝沢規朗は、県内の「特殊な器台」について北陸地方の装飾器台と関連させつつ、「中島廻りタイプ」（図 1-7）と「鍔付き結合器台」（図 1-9）に分類する案を提示した。滝沢がとりあげた「中島廻りタイプ」と「鍔付き結合器台」

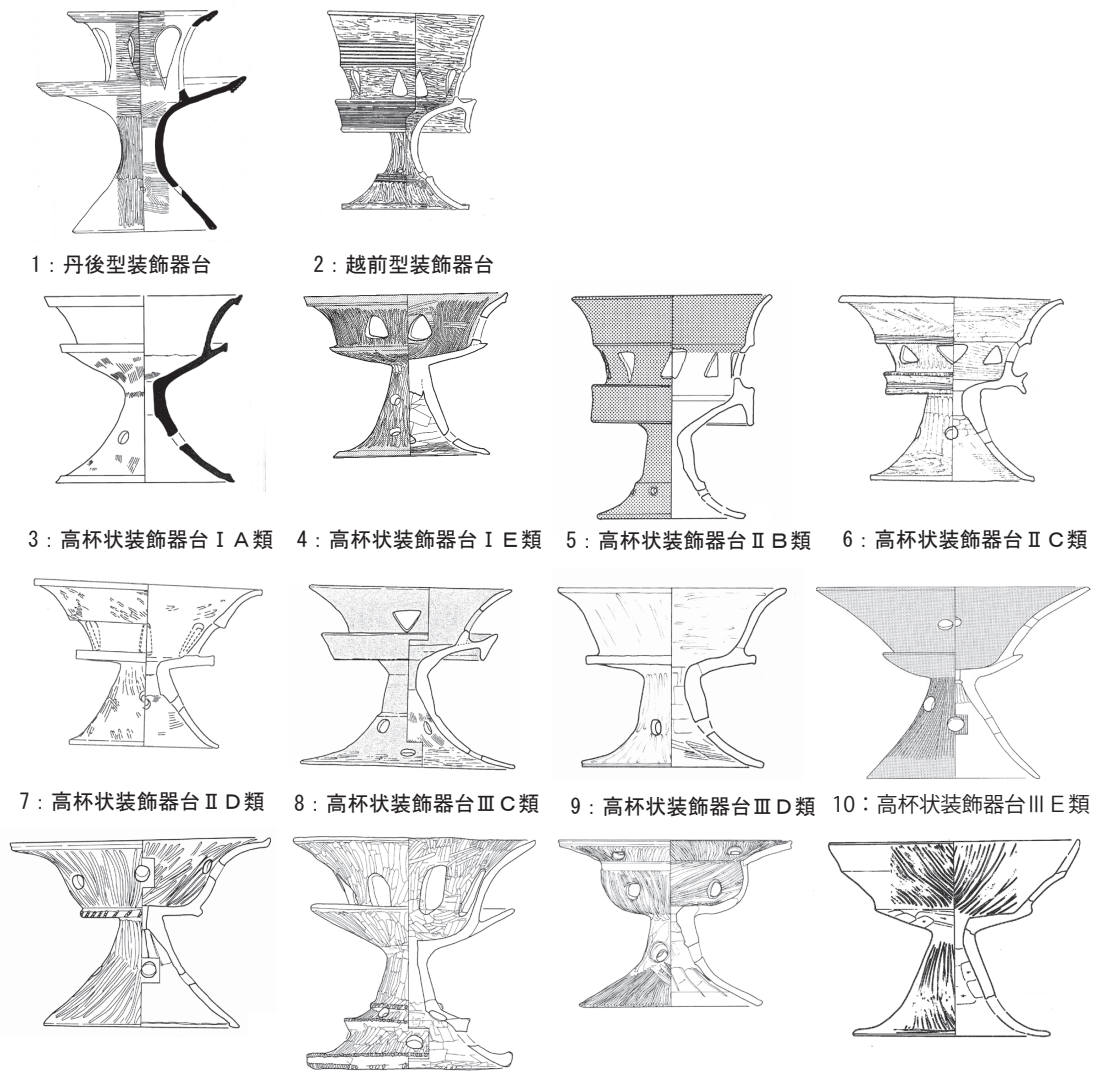


図１　典型的な装飾器台（1・2）と東日本の高杯状装飾器台（3 ― 14）

1 西谷墳墓群（京都府）　2 清間遺跡（福井県）　3 下淵名塚越遺跡（群馬県）　4 辺田古墳群（千葉県）　5 榎田遺跡（山梨県）　6 雀宮（栃木県）　7 西川内南遺跡（新潟県）　8 中耕遺跡（埼玉県）　9 下田中遺跡（群馬県）　10 広面遺跡（埼玉県）　11 東原Ｂ遺跡（群馬県）　12 原町東遺跡（東京都）　13 荒砥北原遺跡（群馬県）　14 前田遺跡（長野県）

は現在でも新潟県内からの出土例が多く、東日本のなかでも新潟県地域に特有のものとして考えられる。

本稿では高杯状装飾器台のなかで新潟県に盛行するⅡＤとⅢＤ類に対して「越後型高杯状装飾器台」および「越後系高杯状装飾器台」という名称をもちいる。さらに、装飾器台に類似する高杯状

装飾器台（図 1-3・5）については「丹後系高杯状装飾器台」・「越前系高杯状装飾器台」という名称をもちいることで、若狭湾沿岸地域で盛行する丹後型装飾器台（図 1-1）・越前型装飾器台（図 1-2）と区別することにする。

（４）編年について　越前地方の装飾器台については型式学的な分類が行われており、器壁が比較的薄くて体部・口縁部がさほど外反しない A タイプから、器壁が比較的厚く、体部・口縁部が外反して外上方へのびる B タイプへという変遷が想定された（栃木・宮本 1981）。

1986 年にも装飾器台について変遷案が提出され、新しい段階になるにつれて横長のものから縦長のものへ、口縁部形態は短ものから長いものへ、脚部が矮小化し、透穴の数が減少することなどを指摘する。また、高杯状器台を結合器台の省略形として考える見解も表明している（宮本 1986）。

楠は先行の研究を踏まえ、器受部の形態によって A ～ E 類に 5 大別した装飾器台を 1 期から 4 期にわけて時系列的な変化を分析した（楠 2003）。そして、「受部の立ちあがりと鞍部口縁の間隔」が近接しているものは離れているものから派生することを指摘し、出土状況の変化や粗製品の増加を考慮して 2 期と 3 期の間に大きな画期をみとめている。

2005 年には、関東地方と越前地方を仲介する地域のひとつである新潟県から出土した資料をもとに画期的な論考も提出されている（滝沢 2005）。論文の中で楠による装飾器台編年で 1 期に該当する（Ｓ字状スタンプ文の施された）装飾器台が県内から出土していることや、受部が有段か否かによる時期差についても言及がなされている点が注目される。

滝沢は越後地方で出土した高杯状装飾器台をとりあげ、受部が有段化するか否かでⅠ・Ⅱ類に分類し、Ⅰ類については越前地方の資料との共通性よりも在地的な属性に注目して「中島廻りタイプ」（図 1-7）と命名し、Ⅱ類とした「鍔付き結合器台」（図 1-9）の成立を考える上で重要不可欠のものと主張する。ただし、滝沢の論文では鍔をもたないタイプ（いわゆる「高杯状器台」）を除外しており、「高杯状器台」も含めた高杯状装飾器台全体を網羅した編年案とはなっていない。

埼玉県域から出土した高杯状装飾器台については、利根川章彦によって編年案が提出されている。利根川は「結合器台」のなかでも透穴が大きな A 群（装飾器台系）、透穴が縮小して受部の中位にくる B 群（結合器台形土器系）、鍔をもった高杯形土器である C 群（鍔付高杯系）、「高杯状器台」を含む D 群（その他）の 4 群に分類する。

利根川は共伴土器から時期を推定し、時間的に重複しながらも A 群→ B 群→ C 群という順に変遷が追えると分析する。また、D 群は A 群に時系列的に遅れるものとした。高杯状装飾器台の系譜については「明らかに別系統と考えられる少数例を除けば、ほとんどを北陸系土器の系譜として考えるべきである」と述べている（利根川 1999）。

利根川の編年案は関東地方で初めての編年研究であり、2000 年代の研究につながる示唆的なものであった。しかし、A 群と B 群の具体的な差異が明瞭でなく両者の差異は装飾器台との差異より

小さいという意見もあり（滝沢 2005）、西日本の装飾器台研究者であればA群全体を「装飾器台系」と呼ぶことに違和感を覚える分類案となっている。おそらくB群とともに「結合器台」に含める方がまとまりがよいと思われる。

第2節　問題の所在

従来の関東地方における高杯状装飾器台に関する研究は「結合器台」（図1-3～1-10・12）についての研究が中心となっており、「高杯状器台」（図1-11・13・14）については未だに多くの問題が残されている。そのため、「高杯状器台」も含めた全体的な系譜関係の研究は余り進んでいないのが現状である。

「結合器台」のなかでも、とくにⅢD類（図1-9）の成立は越後型高杯状装飾器台（図1-7）の存在を抜きにして考えられず、北陸地方の装飾器台との関係性も窺える。これに対し、「高杯状器台」は北陸地方の装飾器台と著しく異なる器形をしているため型式学的な研究が進んでいない。問題の「高杯状器台」は、鍔状の突帯をもったり杯部中央に貫通孔を穿ったりする点で通常の高杯形土器と異なっており、装飾器台の系譜をひく省略形としてみなされるか東海系土器と関係する土器群と考えられてきた。前述したように、装飾器台と別系統として考えられる「高杯状器台」こそ、最も東日本的な「特殊な器台」であるともいえる。

また、関東地方周辺の「結合器台」についても日本海沿岸地域で盛行する装飾器台の系譜にありながら在地的な変容がつよくみられ、多くのものは形態的に「高杯状器台」に近似していく点を重視すべきであろう。高杯状装飾器台全体の変遷を研究するにあたって優先すべき課題は、「高杯状器台」と「結合器台」に大別して前者を後者との関係だけで考えるのではなく、高杯状装飾器台の両翼をになう東日本に特有の土器群として両者を一括した上で、広域的な系譜関係を考慮した分類案を提示することにあると筆者は考える。

第2章　高杯状装飾器台の分類

第1節　部分名称

本章では高杯状装飾器台の分類案を提示し、関東地方を中心にした東日本における出土例を各都県別にながめていく。なお、若狭湾岸地域から出土した装飾器台については成立・変遷案が提出されており、今回の分類案から外し、関東周辺の高杯状装飾器台との関連において触れるにとどめる。

それに先立ち、高杯状装飾器台の部分名称に触れておきたい。今回は形態的な特徴が似ている装飾器台の部分名称（楠 2003）を参考にして部分名称を設定する。（図2）

受部：盃部から立ち上がる部分で、「装飾器台」の身部にあたる部分をさす。

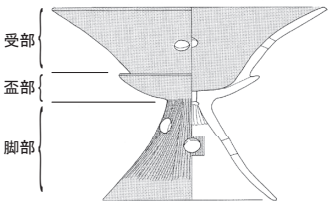


図2　高杯状装飾器台の部位

盃部：脚部から盃状に広がる部分で、「装飾器台」の器受部にあたる部分をさす。

脚部：装飾器台の脚部（楠 2003）にあたる部分

第 2 節　分類案

高杯状装飾器台の分類は熊野による分類をはじめ、多くの研究者によってなされてきた。本論では全体形のあきらかな資料に制限があるため、図化されることが多い受部と盃部の形態で細分し、両者の分類を組み合わせて呼ぶことにする（図 1）。

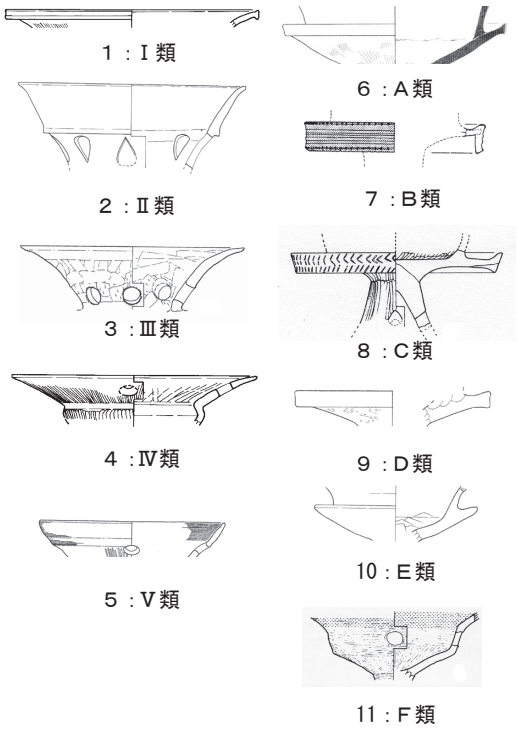


図 3　受部・盃部の分類

（1）受部の分類　受部はⅠ～Ⅴの 5 類に分ける。

Ⅰ類：受部端部を上下につまみだすもの

Ⅱ類：二重口縁もしくは複合口縁のもの

Ⅲ類：受部がゆるやかに外反するもの

Ⅳ類：受部が屈曲し、中位内面に稜をもつもの

Ⅴ類：受部が内弯するもの

（2）盃部の分類　盃部は A ～ F の 6 類に分ける。

A 類：盃端部を摘み出して斜面をもつもの

B 類：盃部口縁が突出して下垂するもの

C 類：盃部口縁が突出して上下に張り出すもの

D 類：盃部口縁が突出して面取りするもの

E 類：盃部口縁が突出して鍔状になるもの

F 類：盃部が突出せず、杯状を呈するもの

（3）脚部の分類　脚部についても便宜上ア～ウの 3 類に分ける。

ア類：脚裾部が有段・有稜になるもの

イ類：脚部が八の字状に開くもの。高杯状装飾器台の多くがイ類の脚部をもつ。

ウ類：和泉式高杯形土器の脚部と類似しており、脚上半が柱状化しているもの。

（4）受部と盃部の特徴による高杯状装飾器台の分類（図 1）　以下、受部と盃部の組み合わせ実際に確認された 12 パターンを具体的にみていく。

Ⅰ A 類：受部端部がつまみだされ、盃部の端部もつまみだされるもの。

ⅠＥ類：受部端部がつまみだされ、盃部が鍔状に突出するもの。

ⅡＢ類：受部が二重口縁で、盃部の端部が下垂するものや盃部端面に沈線を巡らせたり、透穴を穿ったりする例もあるが、基本的に端部は面取りするにとどめるもの。三角形の透穴を上下逆転させながら配列するものが多い。

ⅡＣ類：受部が二重口縁で、盃部の端部が摘み出されるもの盃部端面には沈線をめぐらせたり、キザミを施すなど装飾性が高く、有稜あるいは有段の脚部をもつもの。

ⅡＤ類：受部が二重口縁で、盃部が水平に突出して面取りするもの。受部の透穴は三角形とともに円形が多くなり、裾部に円形の透穴を穿つのが一般的なもの。

ⅢＣ類：受部がゆるやかに外反し、盃部の端部がつまみだされるもの。

ⅢＤ類：受部がゆるやかに外反し、盃部が突出して面取りされるもの。透穴は円形が基本的になり、三角形は僅少である。また、受部に透穴をもたないものもある。

ⅢＥ類：受部がゆるやかに外反し、盃部が鍔状に突出するもの。受部にも脚部にも透穴をもたないものや、受部か脚部のどちらかだけに透穴をもつものがある。透穴の形は円形のものが圧倒的であり、三角形のものは見当たらない。

ⅢＦ類：受部がゆるやかに外反し、盃部が突出せずに杯状となるもの。透穴は円形のものだけになり、群馬県の例では受部に透穴を２段に配するものがある。

ⅣＥ類：受部が屈曲したり、するどく外反したりするもので盃部が上向きに突出するもの。

ⅣＦ類：受部が屈曲したり、するどく外反したりするもので、盃部が突出せずに杯状となるもの。

ⅤＦ類：受部が内弯し、盃部が突出せずに杯状となるもの。

第３章　分析

第１節　系譜的分析

前章で分類した高杯状装飾器台の各類について、その系譜関係を出土数の多寡という点から分析する。具体的には各類における各都県の占める割合を求め、各類型の分布に偏りがどの程度みられるかを分析する。

ただし、ⅠＡ類・ⅠＥ類・ⅡＢ類・ⅡＣ類については、類似した器台形土器が丹後地方や越前地方から多数出土しているため、それぞれ若狭湾岸地域の装飾器台に祖形を求められるものとする。

（１）ⅠＡ類（図 7-1 ～ 5）　受部口縁と盃部口縁の端部を摘み出して斜面をつくりだすという形態的な特徴から、丹後型装飾器台の模倣品とみなす。ただし、受部口縁と盃部口縁の端部に擬凹線文施さない点や、脚部が八の字状にひらく点で丹後地方のものと異なる特徴も注目される。ⅠＡ類は「丹後系高杯状装飾器台」と考える。

（２）ⅠＥ類（図 7-6）　千葉県の辺田古墳群から出土した資料が唯一の例である。受部口縁を摘み出して斜面をつくりだし、盃部が鍔状に突出する。その形態的な特徴からⅠＡ類とともに丹後型装飾器台の系譜をひくものと考えられるが、受部口縁と盃部口縁の端部に擬凹線文施さない点や、脚

部が八の字状にひらく点で在地化傾向がみられる。ⅠＥ類はⅠＡ類とともに丹後系の高杯状装飾器台と考える。

（３）ⅡＢ類（図 7-7 ～ 17）　受部が二重口縁で、盃部の端部が下垂するものは越前地方に類例が求められる。ただし、必ずしも盃部端面に沈線を巡らせたり、透穴を穿ったりするわけではなく、基本的に端部は面取りするにとどめる。三角形の透穴を上下逆転させながら配列するものが多い点は越前型装飾器台と共通する。ⅡＢ類は「越前系高杯状装飾器台」と考える。

（４）ⅡＣ類（図 7-18 ～ 21）　盃部端面には沈線をめぐらせ、キザミを施すなど装飾性が高く、有稜あるいは有段の脚部をもつといった形態的な特徴は越前型装飾器台と共通する。ただし、有段脚でない例もあり、在地化したものも含まれる。ⅡＣ類はⅡＢ類と同様に越前系の高杯状装飾器台と考える。

（５）ⅡＤ類（図 8-1 ～ 13）　受部が二重口縁で越前型装飾器台と共通しているが、盃部を水平に突出させて面取りするなど在地化が進んでいるものと考えられる。受部の透穴は三角形とともに円形が多くなり、裾部に円形の透穴を穿つのが一般的となる。14 個体中 8 個体が新潟県出土例であり過半数を占める。越前系装飾器台の影響をうけつつ、新潟県下で成立したものと考えられる。ⅡＤ類は越後型高杯状装飾器台と考える。

（６）ⅢＣ類（図 8-14 ～ 16）　群馬・埼玉・千葉県域から 1 点ずつ出土しており、関東地方に分布が限定される。盃部口縁を上下に摘み出す点などから装飾器台の影響が窺われるが、複合口縁ではない点などから在地的な属性を取りこんだものと考えられる。埼玉県例では脚部に透穴を 2 段に配する。ⅢＣ類を北陸系・関東系折衷型と呼ぶことにする。

（７）ⅢＤ類（図 8-17 ～ 9-25）　受部がゆるやかに外反し、盃部が水平に突出するなど。装飾器台とは形態的に異なるものである。また、受部に透穴をもたないものがある。従来「結合器台」と呼ばれてきた土器群に属するが、盃部の端部を面取りする点から越後型高杯状装飾器台の影響を受けつつ成立したものと考えられる。29 個体中の 11 個体が新潟県出土例であることからも、越後系高杯状装飾器台の模倣品、もしくは越後地方からの搬入品とみなし得る。ⅢＤ類はⅡＤ類の系譜をひく越後系高杯状装飾器台と考える。

（８）ⅢＥ類（図 10-1 ～ 13-26）　受部がゆるやかに外反し、盃部が鍔状に突出するなど装飾器台と著しく形態を異にする。受部にも脚部にも透穴をもたないものや、受部か脚部のどちらかだけに透穴をもつ点でも在地化傾向が強い。従来「結合器台」と呼ばれてきた土器群に属するものだが、受部や脚部に越後系のⅢＣ類と形態的に共通する点がみられる。千葉県の出土例が最も多く（27/95）、埼玉県（18/95）と群馬県（17/95）がそれに次ぐ。

（９）ⅢＦ類（図 14-1 ～ 15-23）　受部がゆるやかに外反して盃部が突出せずに杯状となり、装飾器台との共通点は見出し難い。従来「結合器台」と呼ばれてきた土器群に属するものや、「高杯状器台」と呼ばれてきた土器群に属するが含まれている。全体の四半分（11/47）が群馬県内からの出土例である。

(10) Ⅳ E 類（図 16-1 ～ 22）　形態的にはⅢ E 類に最も類似しており、受部が屈曲する点で相違がみられる。関東地方以外の地域では確認されていない。Ⅲ E 類とⅣ F 類の中間的な形態をとり、埼玉県からの出土例が半数近くにのぼり（12/26 個体）、千葉県（5/26）と合計すると過半数を占める。

(11) Ⅳ F 類（図 17-1 ～ 19-5）　受部が屈曲したり、するどく外反したりするもので、盃部が突出せずに杯状となるものでⅣ E 類に類似する。従来「高杯状器台」と呼ばれた土器群に属するもので、東日本的なものとみなされてきた。

同様なタイプの土器は東海地方や北陸地方でも出土している。山梨県と千葉県の出土例が最も多く、神奈川県がそれに次ぐ。

(12) Ⅴ F 類（図 19-6・7）　受部が内弯し、盃部が突出せずに杯状となるもの。出土例は少なく宮城県と長野県の例に限られる。

第 2 節　各類の細別と地域性

Ⅰ A 類・Ⅰ E 類・Ⅱ C 類・Ⅲ C 類・Ⅴ F 類については、資料数に限りがあるため細別を行わず、ここではⅡ B 類・Ⅱ D 類・Ⅲ D 類・Ⅲ E 類・Ⅲ F 類・Ⅳ E 類・Ⅳ F 類について細別を行う。そして、各類の地域性についても述べる。

（1）Ⅱ B 類：越前系　Ⅱ B 類として分類した土器群は、受部が二重口縁で、先端の下垂する盃部をもつものである。三角形の透穴を上下逆転させながら受部に穿たれ、1 例だけ盃部の下垂突帯に円形の透穴をもつものがある。盃部の端面に擬凹線文や透穴を施すものと、端面に施文しないものに細別される。脚部は有稜のものと稜をもたないものに細別される。有稜のものには稜から裾にかけての部分に透穴を穿つものが 1 例ある。本稿では、盃部端面に擬凹線をめぐらすか透穴を穿ち、有段脚のものをⅡ B1 類、盃部端面は面取りするだけで有段脚に透穴をもつものをⅡ B2 類、盃部端面は面取りするだけで脚部に透穴をもたないものをⅡ B3 類とする。

（2）Ⅱ D 類：越後型　Ⅱ D 類として分類した土器群は、受部が二重口縁で、盃部が水平に突出して面取りするものである。受部の透穴は三角形と円形のものに細別される。脚部は有稜のものと稜をもたないものに細別する。本稿では、受部に三角形の透穴を穿って有稜脚のものをⅡ D1 類、受部に三角形の透穴を穿って脚部に稜がないものをⅡ D2 類、受部に円形の透穴を穿つものをⅡ D3 類とする。

（3）Ⅲ D 類：越後系　Ⅲ D 類として分類したものは、受部がゆるやかに外反し、盃部が突出して面取りされるものである。受部の透穴は円形と三角形のものに細別される。また、透穴をもたないものが存在する。脚部には円形の透穴を穿つものと、透穴をもたないものに細別される。本稿では、三角形の透穴をもつものをⅢ D1 類、受部と脚部に円形の透穴を穿つものをⅢ D2 類、脚部のみに円形の透穴をもつものをⅢ C3 類とする。

（4）Ⅲ E 類：系譜未詳　Ⅲ E として分類したものは、受部がゆるやかに外反して盃部が鍔状に突出するものである。受部の透穴は円形のものが一般的であるが、三角形の透穴をもつものや、大型

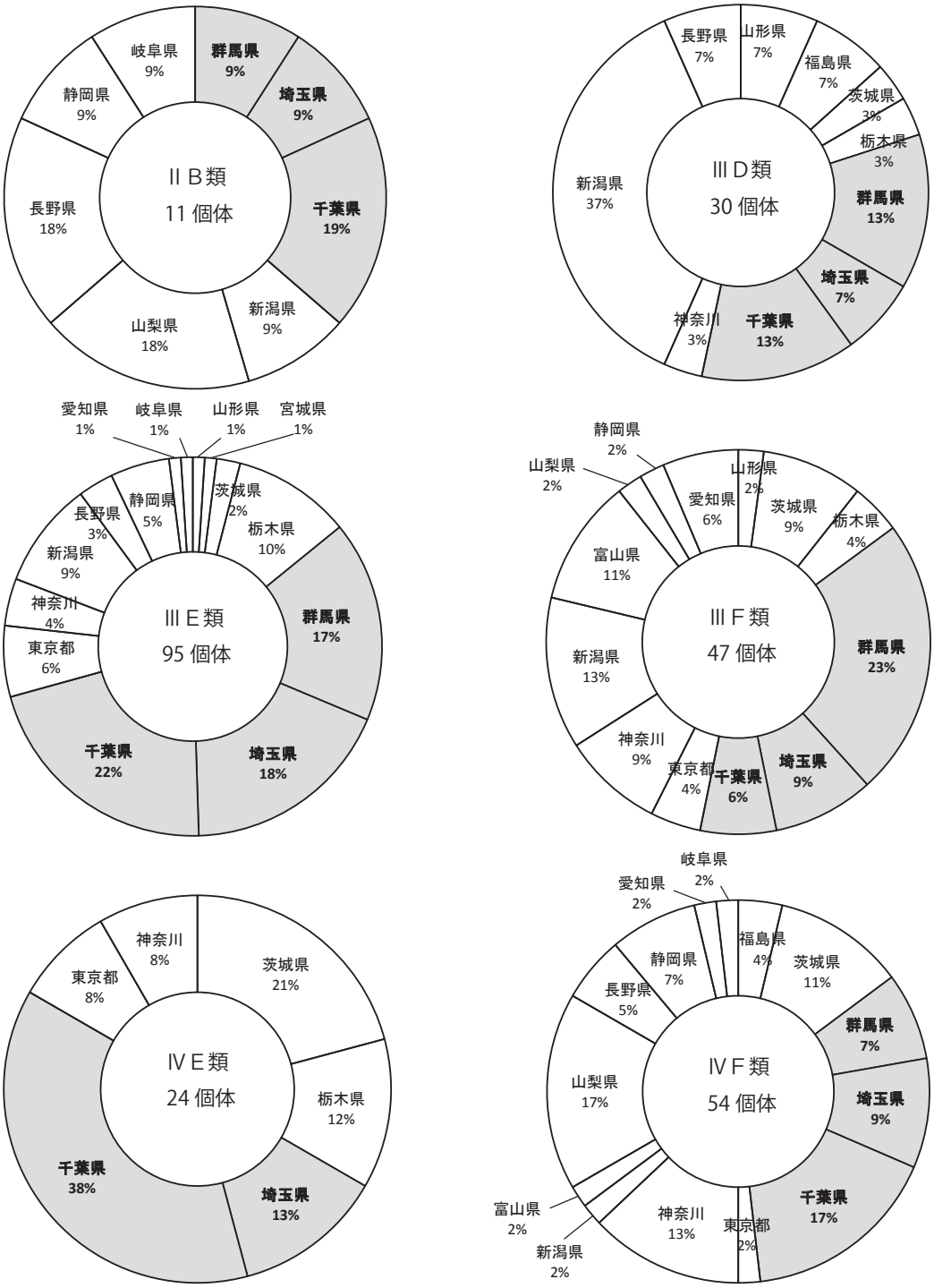


図 4　各類出土の都県別比率

化した透穴をもつものや、透穴をもたないものに細別される脚部は透穴のあるものとないものに細別され、透穴が2段に配して穿たれるものも数例もある。本稿では、三角形や大きな透穴を穿つものをⅢE1類、受部と脚部に透穴を穿つものをⅢE2類、脚部にのみ透穴をもつものをⅢE3類、透穴をもたないものをⅢE4類とする。

（5）ⅢF類：系譜未詳　ⅢF類として分類したものは受部がゆるやかに外反し、盃部が杯状になるものである。受部には円形の透穴を穿つものと、透穴をもたないものに細別される。また、透穴を2段に配するものも数例ある。盃部は有稜のものと、稜をもたないものに細別される。また、盃部に稜をもつもののなかには、稜にキザミを施文する例がある。脚部は透穴があるものと、もたないものに細別される。また、透穴を2段に配するものも存在する。脚部に稜をもつものがある。

本稿では、受部か脚部、または両方に2段の透穴を配するものをⅢF1類、受部と脚部に透穴を配するものをⅢF2類、受部のみに透穴を穿つものをⅢF3類、脚部のみに透穴を穿つものをⅢF4類とする。なお、ⅢF1類には脚部に稜をもつ個体が含まれる。

（6）ⅣE類：系譜未詳　ⅣE類として分類したものは受部が屈曲したり、するどく外反したりするもので、盃部が鍔状になるものである。受部の透穴は円形が基本であるが、長円形や隅丸方形の例がみられる。また、透穴を穿たないものもある。脚部は有段のものが1例あるが、基本的には無段脚である。本稿では、受部と脚部に透穴を穿つものをⅣE1類、脚部のみに透穴を穿つものをⅣE2類とする。

（7）ⅣF類：東海系　ⅣF類として分類したものは受部が屈曲したり、するどく外反したりするもので、盃部が杯状になるものである。受部は透穴をもつものと、もたないものに細別される。さらに、透穴があるものは、その形で細別される。脚部は透穴をもつものと、もたないものに細別される。透穴があるものには透穴を2段に配するものが含まれる。本稿では、受部の透穴が円形以外のものをⅣF1類、脚部に透穴を2段に配するものをⅣF2類、透穴を受部と脚部に穿つものをⅣF3類、受け部に透穴をもたないものをⅣF4類とする。なお、ⅣF1類には受部の口縁端部に貼付文をもつものが含まれる。

第3節　編年案

（1）高杯状装飾器台が出土した遺跡　本節で編年案を提示するにあたり、まず共伴遺物から時期の特定できる高杯状装飾器台の出土例をとりあげて検討する。後述するように関東地方以外の地域では住居跡からの出土例がきわめて少ないため、ここでは関東地方の遺跡が中心となる。また、装飾器台に類する丹後系高杯状装飾器台、越前系高杯状装飾器台、越後型高杯状装飾器台、および越後系高杯状装飾器台については住居跡以外からの出土例がほとんどであり、良好な一括資料に恵まれないため存続期間の下限を示すにとどめる。なお、高杯状装飾器台の出土した住居址の時期については考古学資料大観の編年（比田井2002・原2002）を規準に推定している。

東北地方南部は住居跡からの出土例が少なく、良好な一括資料が出土しているのは福島県の2遺

跡である。会津坂下町の中西遺跡[4]で第4号住居跡（前期前葉）[5]からⅣF類、いわき市の菅俣B遺跡で第16号住居跡（前期前葉）からⅢD2類が出土している。

関東地方は住居跡からの出土例が豊富である。茨城県、栃木県、群馬県、埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県の順にみていく。茨城県は5遺跡である。結城市の善長寺遺跡で第25号住居跡（前期前葉）からⅢD2類、同市の小田林遺跡で第27号住居跡（前期中葉）からⅢF類、かすみがうら市の戸崎中山遺跡で第67号住居跡（前期中葉）からⅣE2類、阿見町の薬師入遺跡で第8号住居跡（前期中葉）からⅣF3類、第106号住居跡（前期前葉）からⅣF2類、ひたちなか市の鷹ノ巣遺跡で第41号住居跡（前期後葉）からⅢE2類が出土している。

栃木県は3遺跡である。小山市の寺野東遺跡で145号住居址（前期中葉）からⅢE2・ⅢF1・ⅢF2類、大平町の猿渕遺跡で1号住居址（前期後葉）からⅢD1類、下野市の烏森遺跡で7号住居址（前期前葉）からⅢE2類が出土している。群馬県は7遺跡である。前橋市の内堀遺跡でH－49号住居址（前期前葉）からⅣF3類、同市の村主遺跡で第2号住居跡（前期中葉）からⅢF1類、同市の東原B遺跡で第35号住居跡（古墳時代初頭）からⅢF2類、同市の荒砥前原遺跡でC区2号住居址（前期前葉）からⅢE4類、太田市の唐桶田遺跡で第16号住居址（前期前葉）からⅢE2、同市の下田中遺跡で11号住居址（前期中葉）からⅢD3類、甘楽町の西原遺跡で27号住居址（前期前葉）からⅣF1類が出土している。埼玉県は3遺跡である。東松山市の下道添遺跡で第11号住居跡（前期前葉）からⅢE3類、さいたま市の原遺跡で第3号住居跡（古墳時代初頭）からⅡB類、熊谷市の北島遺跡で第339号住居跡（古墳時代初頭）からⅢE2類が出土している。

千葉県は7遺跡である。柏市の田中小遺跡で10号住居址（前期前葉）からⅢE1、11号住居址（前期前葉）からⅢF1類、同市の戸張一番割遺跡で5号住居址（前期前葉）からⅡC類、13号住居址（古墳時代初頭）からⅣF4類、市原市の草刈遺跡でD035A住居跡（前期前葉）からⅣF3、同市の南中台遺跡で27号住居址（前期前葉）からⅣE2類、45号住居址（古墳時代初頭）からⅣE2類、印旛村の平賀遺跡で第28号住居跡（前期前葉）からⅢF2類、印西市の泉北側第2遺跡で13号住居址（古墳時代初頭）からⅣE1類、千葉市の上谷津第1遺跡で16号住居址（前期中葉）からⅢE1類が出土している。東京都は3遺跡である。北区の豊島馬場遺跡で12号住居址（前期中葉）からⅢE3類、文京区の原町東遺跡で5号住居址（古墳時代初頭）からⅣE1類、日野市の平山遺跡で第4号住居跡（前期中葉）からⅣE類が出土している。神奈川県は1遺跡のみである。横浜市のなすな原遺跡で第2号住居跡（前期前葉）からⅣF4類が出土している。

中部地方は住居跡からの出土例が少なく、良好な一括資料が出土しているのは長野・静岡・愛知各県で1遺跡ずつである。松本市の向畑遺跡で第66号住居跡（古墳時代初頭）からⅡB類、三島市の源平山遺跡で11号住居址（前期前葉）からⅢE類、瀬戸市の惣作・鐘場遺跡でSB221（古墳時代初頭）からⅣF類が出土している。

（２）各類の消長　ここからは（１）で紹介した資料、とくに関東地方のⅢ類・Ⅳ類を中心とした各類の消長についてのべる。古墳時代初頭以前のものと考えられる一括資料は、原Ｂ遺跡（ⅢF2)、原遺跡（ⅡB)、北島遺跡（ⅢE2)、戸張一番割遺跡（ⅣF4)、南中台遺跡（ⅣE2)、泉北側第２遺跡（ⅣE1)、原町東遺跡（ⅣE1)、向畑遺跡（ⅡB)、惣作・鐘場遺跡（ⅣF）でみとめられる。したがって、古墳時代初頭の段階でⅡB（1・2）類、ⅢE類、ⅢF類、ⅣE（1・2）類、ⅣF類が既に成立していたものと考えられる。

古墳時代前期前葉のものと考えられる一括資料は、中西遺跡（ⅣF)、菅俣Ｂ遺跡（ⅢD2)、薬師入遺跡（ⅣF2)、善長寺遺跡（ⅢD2)、烏森遺跡（ⅢE2)、内堀遺跡（ⅣF3)、荒砥前原遺跡（ⅢE4)、唐桶田遺跡（ⅢE2)、西原遺跡（ⅣF1)、下道添遺跡（ⅢE3)、田中小遺跡（ⅢE1・ⅢF1)、戸張一番割遺跡（ⅡC)、草刈遺跡（ⅣF3)、南中台遺跡（ⅣE2)、上谷津第１遺跡（ⅢE1)、平賀遺跡（ⅢF2)、なすな原遺跡（ⅣF4)、源平山遺跡（ⅢE）でみとめられる。

したがって、古墳前期前葉の段階でⅡB（1・2）類、ⅢE2類、ⅢF2類、ⅣE（1・2）類、ⅣF類に加えて、ⅡC類、ⅢD類、ⅢE（1・3・4）類、ⅢF1類、ⅣF（1～4）類が既に成立しており、各類が揃う段階といえる。

古墳時代前期中葉のものと考えられる一括資料は、薬師入遺跡（ⅣF3)、小田林遺跡（ⅢF)、戸崎中山遺跡（ⅣE2)、寺の東遺跡（ⅢE2・ⅢF1・ⅢF2)、村主遺跡（ⅢF1)、下田中遺跡（ⅢD3)、豊島馬場遺跡（ⅢE3)、平山遺跡（ⅣE）でみとめられる。この段階でⅠ類、Ⅱ類が消滅するものと想定される。古墳時代前期後葉のものと考えられる一括資料は、鷹ノ巣遺跡（ⅢE2）と猿渕遺跡（ⅢD1）でみとめられる。この段階においてⅢE類とⅢD類だけが存続し、Ⅳ類およびⅢF類が消滅するものと想定される。

（３）編年案　ほとんどの高杯状装飾器台は古墳時代前期前半に位置付けられるもので、弥生終末期にさかのぼる資料や、古墳時代中期にまで下るものは少ないことが明らかとなった。これを踏まえて、関東周辺地域を含めた東日本全体の高杯状装飾器台に関する編年案を以下に提示する（図５)。

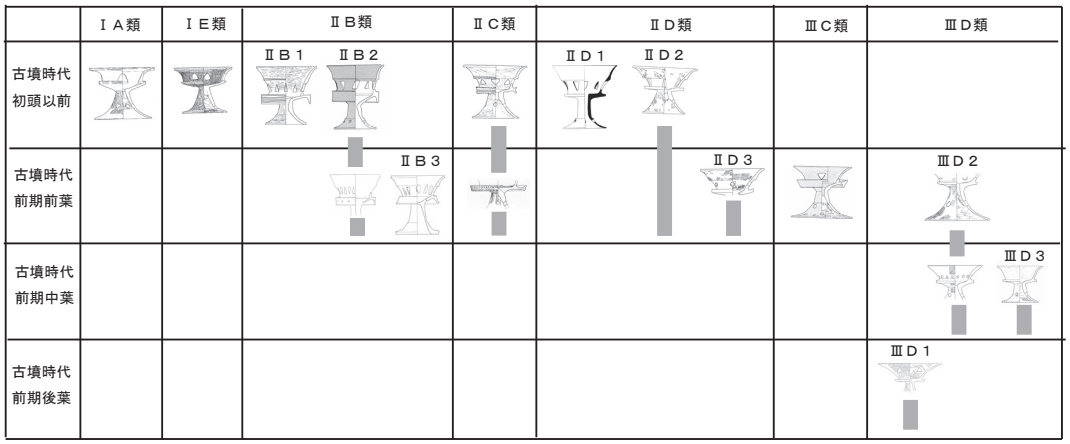


図５　高杯状装飾器台の編年案

ただし、Ⅰ類・ⅢC類・ⅤF類については良好な一括資料が提示できなかったため、近接する各類型から存続期間を推定する。Ⅰ類はⅡ類、ⅢC類はⅢD類との関係性を重視して、それぞれ古墳時代初頭以前と古墳時代前期前葉に成立したものと考える。また、ⅤF類についてはⅢF類・ⅣF類との比較から古墳時代前期中葉に成立時期を想定しておく。

古墳時代初頭以前：若狭湾岸地域の装飾器台が搬入・模倣されてⅠA類・ⅠE類・ⅡB類・ⅡC類が成立し、ほぼ同時期にⅡD類・ⅢE2類・ⅢF2類・ⅣE類・ⅣF4類が成立する段階と考える。

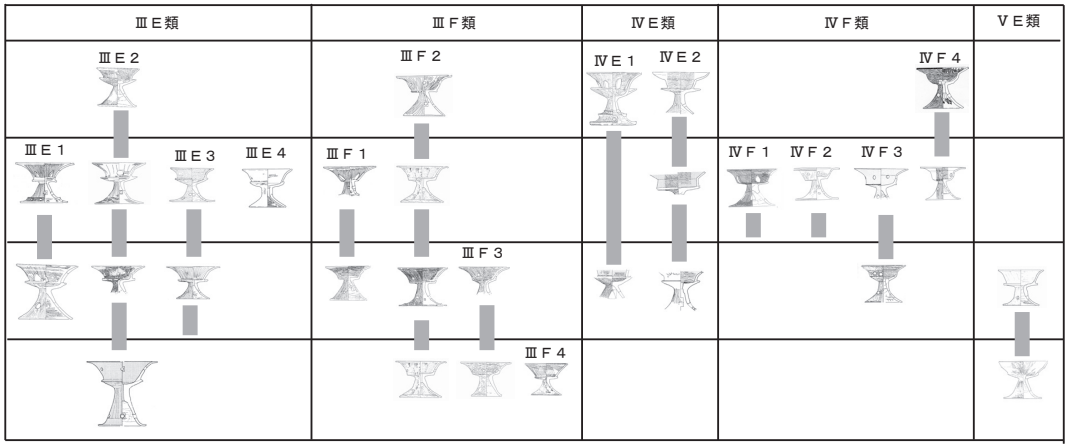
古墳時代前期前葉：Ⅰ類が姿を消す一方であらたにⅢC類（折衷型）・ⅢD2類が成立する段階である。また、ⅢE・ⅢF・ⅣFの各類でバリエーションが豊富になり、ⅡB・ⅡD類で1類と2類が消滅してあらたに3類が成立する。

古墳時代前期中葉：Ⅱ類が姿を消し、ⅢD・ⅢF類であらたにと成立する段階である。ⅢE類では4類が消滅して1～3類がのこり、ⅣE類では3類のみが存続する。

古墳時代前期後葉：Ⅳ類が消滅する一方でⅢD1類とⅢF4類があらたに成立する段階である。ⅢE類ではⅢE2類がのこり、ⅤF類も存続する。

このように、高杯状装飾器台は古墳時代前期前葉の段階で最も盛行し、かつ受部と脚部に穿たれる透穴にも多種多様なものが見受けられるようになる点が注目される。なかでも受部や脚部に透穴を二段に配するⅢF1類・ⅣF2類は最も在地化のすすんだ形態を示すものと考えられる。

最後に、本章で検討を行わなかった高杯状装飾器台の脚部に関して言及しておきたい。有段脚部（ア類）は古墳前期中葉まで見られるが、その後は例がみられなくなる。また、古墳時代前期後葉以降には柱状化した脚部（ウ類）をもつ高杯状装飾器台がみられるようになる。全体としてはア・ウ類が散見されるものの、脚部はイ類のものが圧倒的多数を占めている。



第４章　考察

第１節　出土状況の傾向

（１）各県における出土状況の傾向　高杯状装飾器台の出土状況を各都県別に概観し、各類における傾向についても触れる。住居跡からの出土率が高い地域は、福島・茨城・栃木・東京・長野県であり、群馬県も住居跡からの出土例が多い地域といえる。これに対し、住居跡以外からの出土率が高い地域は新潟・富山・静岡・愛知県である。東日本全体をながめると、埼玉県を除く関東地方（茨城・栃木・東京）とそれに隣接する地域（福島・長野）では住居跡から高杯状装飾器台が多く出土するのに対し、北陸・東海地方（新潟・富山・静岡・愛知）と関東地方の中央部である埼玉県域では住居跡から出土することが稀であるという傾向がうかがえる。

とくに新潟県と長野県の出土状況は対照的である。新潟県域の遺跡では高杯状装飾器台が住居跡から出土することが皆無に等しく、住居跡からの出土例は道端遺跡の一例だけである。これに対して長野県域ではすべて住居跡から出土している。両者の違いを端的に示した代表的な遺跡として、新潟県の西川内南遺跡と長野県の御屋敷遺跡があげられる。西川内南遺跡は北越地区にある遺跡で、溝状遺構や土壙などから９個体が出土している。出土資料はⅡＤ類・ⅢＤ類・ⅢＥ類・ⅢＦ類に分類されるものである。御屋敷遺跡は北信地区にある遺跡で、19号住居跡から５個体が出土している。出土資料はⅢＤ類・ⅢＥ類・ⅣＦ類に分類されるものである。１軒の住居跡から５個体もの高杯状装飾器台が出土するのは異例とされる。

住居跡以外からの出土例では溝状遺構や河川跡からのものが多いけれども、墓域から出土している例が群馬・埼玉・千葉・神奈川・新潟・富山・山梨県で報告されている。とくに群馬県は墓域からの出土例が多い傾向がうかがえる。

（２）各類における出土状況の傾向　ⅠＡ類は群馬・埼玉・千葉県出土の５例に限られるが、住居跡からの出土例が４例にのぼる。ⅠＥ類は辺田古墳群（市原市）出土例だけであるため、出土傾向については言及しない。受部が二重口縁状を呈する土器群（ⅡＢ類・ⅡＣ類・ⅡＤ類）は装飾器台の系譜をひくものであるが、全体として住居以外からの出土例が多いという傾向を示す[3)]。ただし、ⅡＢ類だけは住居跡内からの出土例が大半で住居跡以外から出土する例よりも多く、ⅡＣ・ⅡＤ類との間に違いが認められる。出土遺跡は、埼玉県の原遺跡と山梨県の姥塚遺跡、そして長野県の向田遺跡と平出遺跡である。また、新潟県域と千葉県域では、ⅡＢ類・ⅡＣ類・ⅡＤ類が住居跡以外から出土するという傾向が強い点で共通性がみられる。

ゆるやかに外反した受部をもつ土器群（ⅢＤ類・ⅢＥ類・ⅢＦ類）は受部・盃部ともに装飾器台と異なっており、在地化した高杯状装飾器台である。全体として住居跡からと住居跡以外からの出土数に顕著な違いがみられず両方から多く出土している[6)]。するどく外反する受部をもつ土器群（ⅣＥ類・ⅣＦ類）は従来「高杯状器台」と呼ばれてきたものを多く含むが、住居跡からの出土例が住

居以外からの出土例を大きくうわまわる傾向がみられる[7]。ＶＦ類は住居跡からの出土が１例あり、住居以外からの出土例がなく、出土不明が１例ある。

全体としては装飾器台の系譜をひくものは住居以外から出土する傾向にあり、在地化した高杯状装飾器台は住居跡からの出土数が比較的多くなる傾向がよみとれる。

第２節　弥生時代後期から古墳時代前期にかけての地域間交流

本節では弥生時代後期から古墳時代前期にかけての地域間交流について俯瞰し、高杯状装飾器台が成立する時代的背景を考える。具体的には鉄器･墳墓･土器･を取り扱った論文を中心にすすめる。

（１）鉄器　弥生時代の鉄器は九州北部から近畿地方へ地理的な傾斜をもちつつ段階的に普及していき､刀剣や鏃など鉄製武器類は弥生時代後期の段階で墳丘墓などに副葬されることが多くなる(大村 2003)。また、鉄器生産の形態は、代用炉に板状の小鉄片を伴う方保田類型と、玉生産に付随して普及する奈具岡類型に大別され、前者は中国・近畿地方に散見されるのに対し、後者は九州北部から山陰・北陸地方に分布する（野島 1997)。

日本海沿岸地域における鉄器の普及は玉生産と密接に関連する場合があり､その例として野島永･河野一隆は丹後半島の奈具岡遺跡で行われていた水晶製玉作りをとりあげた。そして、弥生時代中期後半に開始される水晶など硬質玉材を原材とした玉類生産に鉄製工具が導入され、後続する緑色凝灰岩・碧玉製玉類の製作における鉄製工具使用に多大な影響を与えたとする（野島・河野 2001)。

近畿地方で石器がなくなるのと余り時間を置かずに鉄器が東日本にみられるようになる背景には、西日本の瀬戸内地方を中心に戦争が多発し、鉄器の確保などを目的とした流通機構の整備がすすんでいたと考えられる。弥生後期後半になると近畿北部から東海地方にかけて刃関双孔鉄剣が広がり、刃関双孔を斜めにあけるものや４つあけるものが関東地方でみられるようになる（野島・髙野 2002)。こうした資料は弥生後期後葉における近畿北部と東日本各地との交流を示唆するものであるとする研究者もいる（髙野 2001)。

野島永もまた、鉄剣や鉄釧などをあつかった論文で、弥時代終末になると拠点的な対外交易をおこなう地域集団が九州北部だけでなく山陰・丹後・北陸などに点在するようになり、関東・中部地方の首長は丹後・北陸・東海との交流を通して鉄素材を手に入れていたという見解を示した。その一方で、同時期の関東南部には呑口式鉄槍と有稜系鉄鏃が浸透しはじめることから、日本海沿岸経由の鉄素材・鉄器の威信財交易を破棄して瀬戸内・近畿・東海と結ばれた新しい地域間交流がうまれた可能性にも言及している（野島 2009)。

古墳時代前期の鍛冶遺構は北部九州・畿内・南関東に分布しているが、北部九州や南関東の例では畿内や東海などの影響を強く受けた外来系の土器が伴出する傾向にある。弥生時代後期の段階で竪穴家屋の煮炊き炉を代用した炉さえみられなかった南関東に専用炉が出現する背景には、畿内・東海地域を中心とした集団がいたことが窺われる（野島 1997)。

（２）墳墓　弥生中期から方形周溝墓が採用された関東地方では、環濠集落が姿を消す三世紀後半から東海西部起源の前方後方形墳墓の築造がはじまる（宇野 1995）。また、西日本的な円形周溝墓が弥生時代終末に群馬県の有馬遺跡で営まれていることから、関東地方と瀬戸内地域の間で日本海沿岸部の近畿北部を経由した地域間交流が行われた可能性を指摘する研究者もいる（髙野 2006）。

古墳時代初頭になると東海・近畿地方に淵源をもつ前方後方墳・前方後円墳が関東地方で営まれるようになる。千葉県の出現期古墳である神門古墳群と高部古墳群の出土遺物および副葬品を比較して、小沢洋は両古墳群が東海系高杯を伴う点で一致するものの、神門古墳群からは装飾壺などの北陸系土器が伴ったり副葬品として玉類が伴ったりするという点で高部古墳群と異なっていることを指摘している（小沢 2000）。

神門四号墳では墳頂・墳丘下から畿内・東海の外来系と在地の土器が出土しており、盛土中からは同古墳よりも一時期前に属する畿内系・東海系の土器が出土している。さらに相模湾岸地域では弥生時代後期の東海系高杯が出土していることから、田中新史は東海地方の勢力が独自に東国とかかわりを持っていた可能性を指摘している（田中 1977）。また、四号墳の棺内からは庄内式併行期に盛行する細身管玉が出土している。

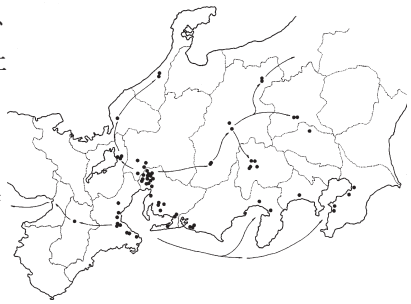


図６　Ｓ字甕Ａ類の分布

（３）土器　弥生時代終末における地域間交流の活発化は土器からも窺え、東海系の土器としてＳ字状口縁をもった台付甕形土器いわゆる「Ｓ字甕」の拡散現象からみた地域間交流に関する研究が有名である（赤塚 1991・図 6）。

Ｓ字甕は濃尾平野低地帯に淵源をもち、伊勢湾沿岸地域を中心に近畿から東北まで分布を広げる。各地に搬入されたＳ字甕は模倣されたり変容されたりすることで在地化を遂げる場合がある（加納 1990・小林 1991 ほか）。

北陸地方では弥生後期後葉になると台付鉢のような新たな祭式土器が出現・盛行したり、「Ｓ字スタンプ文」などの装飾性が強くなったりと徐々に独自色を鮮明にする。装飾壺や装飾器台の成立する弥生時代初頭から古墳時代初頭にかけては北陸東部の土器群が上信地域を経て関東地方へ、北陸西部の土器群は伊勢湾周辺を介して東日本各地へと拡散していく（原田 1994）。さきにのべた鉄剣もこうした動きに伴うものと考えられている（設楽 1996）。

中部地方で内陸に位置する長野県域や山梨県域では、東海系・北陸系の土器がモザイク状に流入する現象が見られる（小林 1991 ほか）。越後系土器の移入される東信・北信地域では、東海地方西部から直接持ち運ばれたと考えられる土器や、中信以南で散見される越前地方に系譜をひく土器が出土しない。Ｓ字甕についても稀少であり、タタキ甕に至っては安源寺遺跡の 1 例を数えるのみで中信以南の様相を異にする（宇賀神 1988）。

関東地方における弥生時代後期から古墳時代前期の土器様相は地域性に富んでおり、縄文と櫛描

文を多用する東関東北部・縄文のみを多用する東関東南部・櫛描文が主体的な北関東・縄文を帯状に施文する南関東の 4 地域に大別される。このような地域性は古墳時代前期になると、西日本の情報をより受容しやすい北関東・南関東と北日本の基盤に属する東関東という図式ではっきり色分けすることができるようになる（比田井 2002）。

弥生時代後期に関東南部で東海系の土器が展開しはじめる。古墳時代初頭になるとＳ字甕やパレス文様壺などの東海西部起源の外来土器が東京湾岸を中心に流入し、北関東を含めた全域で集落遺跡・墳墓内に東海系の影響がみられるようになる（比田井 1997）。また、この段階から北陸系や畿内系の土器も姿をみせるようになる（比田井 1993）。

古墳時代前期には南関東の土器が関東地方の北部・東部へと移動することが知られている。具体的には南武蔵・東京湾岸の土器が下総地方から常陸南部・西部と栃木県域に波及し、上総・下総地方あるいは南武蔵の土器が茨城県域の太平洋側に波及していく（比田井 2004）。古墳前期後葉には柱状脚部の高杯がみられるようになる。

（４）北関東・東関東の地域性　以上の地域間交流を踏まえ、改めて高杯状装飾器台が関東周辺に拡散・定着する背景を考えてみる。弥生時代終末に若狭湾岸地域で盛行する装飾器台の系譜をひく丹後型・越前型装飾器台が日本海沿岸地域との地域間交流によって東日本各地に拡散する。その一部はＳ字甕に代表される東海系の土器とともに伊勢湾岸地域を介した地域間交流によってもたらされた可能性がある。

古墳時代初頭になると新潟県域で越後型高杯状装飾器台ⅡＤ類および越後系高杯状装飾器台ⅢＤ類が成立し、関東地方では東海系土器が波及して高杯状装飾器台ⅢＦ・ⅣＦ類が成立したと考えられる。同時期に関東地方と信越地域との地域間交流を背景にしてⅢＥ類が古墳前期初頭に成立した可能性が高い。

さいごに高杯状装飾器台が最も豊富な千葉・埼玉・群馬県の地域性について触れておきたい。弥生時代後期の当該地域は古墳出現期前夜に北陸系・東海系をはじめとする多様な外来系土器がみられるようになる。こうした北関東・東関東が高杯状装飾器台の最も多い地域として卓越することは、「外来土器の分布上の結節点のようなところに、初期的な古墳が出現するのではないか」（岩崎 1994）という岩崎卓也の指摘と一脈を通じると筆者は考える。

第５章　結論

高杯状装飾器台について分析した結果、その成立過程において北陸系の装飾器台とは別系統の土器が影響を及ぼしていた可能性が高いことが明らかとなった。たしかに、越後系高杯状装飾器台は日本海沿岸地域で盛行する装飾器台の影響で成立するものと考えられるが、その他の高杯状装飾器台が北陸系土器との関係だけで成立するとは考えがたい。

また、「結合器台」の省略形と考えられがちであった「高杯状器台」についても、その成立時期

が古墳時代初頭にまでさかのぼることがあきらかとなった。本稿では余り詳しく述べられなかったが、弥生時代後期に東海・近畿・瀬戸内地方で盛行する杯部の屈曲した高杯形土器が高杯状装飾器台の成立に大きく関わっていたものと考えられる[8)]。

高杯状装飾器台は、従来の名称でいえば「結合器台」と「高杯状器台」にあたる双方の土器群が関係を深める関東地方で成立し、東日本各地に拡散したものと考えられる。おそらく高杯状装飾器台が成立する背景には、当該地域で東海系・北陸系の異系統土器が混在することが必要条件だったのではないかと筆者は考える。

謝辞

本稿は 2011 年度修士課程修了論文として提出した論文の一部を大幅に加筆修正したものである。執筆に当たっては東京大学考古学研究室の設楽博己先生から多大なるご指導を頂いた。末筆ながら、記して深く感謝致します。

注

1) 本稿において「東日本」は、富山・岐阜県域を西限として東北地方の南部までを含む本州島の東部地域を指す名称として用いる。

2) 本稿において「越前地方」は、旧国名で越前・加賀両国の範囲を指すものとする。具体的には福井県北東部と石川県南西部をあわせた地域を指す名称として用いる。

3) ⅡB 類は住居跡からの出土が 4 例、住居以外からの出土が 3 例である。そのほか、出土不明が 2 例ある。ⅡC 類は住居跡からの出土が 1 例、住居以外からの出土が 2 例である。そのほか、出土不明が 1 例ある。ⅡD 類は住居跡から出土例がなく、住居以外からの出土が 8 例である。そのほか、出土不明が 6 例ある。

4) 各遺跡の詳細については別表（遺跡一覧）参照

5) 本稿では考古資料大観の編年（比田井 2002・原 2002）にもとづいて古墳時代初頭以前・古墳時代前期前葉・古墳時代前期中葉・古墳時代後葉の 4 期区分とした。ただし、同編年の弥生終末・古墳早期については古墳時代初頭以前として一括する。

6) ⅢC 類は群馬・埼玉・千葉県出土の 3 例に限られる。ⅢD 類は住居跡からの出土が 11 例、住居以外からの出土が 17 例である。そのほか、出土不明が 1 例ある。ⅢE 類は住居跡からの出土が 53 例、住居以外からの出土が 31 例である。そのほか、出土不明が 11 例ある。ⅢF 類は住居跡からの出土が 19 例、住居以外からの出土が 20 例である。そのほか、出土不明が 4 例ある。

7) ⅣE 類は住居跡からの出土が 11 例、住居以外からの出土が 2 例である。ⅣF 類は住居跡からの出土が 29 例、住居以外からの出土が 18 例である。そのほか、出土不明が 6 例ある。

8) 弥生時代後半の西日本で盛行する高杯形土器には、杯部をするどく外反させるものが含まれ、なかには内面に稜をもつほど屈曲して杯部が水平にひろがる例も存在する。廻間遺跡 SB60 号住居跡の覆土中から出土した高杯形土器のなかには、中央貫通孔の有無に違いはあるものの形態的にⅣF 類とよく似たものが見受けられることを併記しておく。

表１　各類の出土状況

	ⅠA	ⅠE	ⅡB	ⅡC	ⅡD	ⅢC	ⅢD	ⅢE	ⅢF	ⅣE	ⅣF	ⅤF	合計
宮城県												1	1
山形県							2		1				3
福島県	1						2				2		5
茨城県							1		4	5	6		16
栃木県				1			1	10	2	3			17
群馬県	1		1			1	4	17	11		4		39
埼玉県	2		1			1	2	18	4	3	5		36
千葉県	1	1	2	2	3	1	4	21	3	9	9		56
東京都								6	2	2	1		11
神奈川							1	4	4	2	7		18
新潟県			1	1	8		11	9	6		1		37
富山県					1				5		1		7
山梨県			2		1				1		9		13
長野県			2				2	3			3	1	11
静岡県			1					5	1		4		11
愛知県								1	3		1		5
岐阜県			1		1			1			1		4
合計	5	1	11	4	14	3	30	95	47	24	54	2	290

引用・参考文献

赤塚次郎 1991「東海系のトレース」『古代文化』第 44 巻第 6 号 , 35-49

新堀・山村 2004「装飾器台について」『原町東遺跡』, 106 ― 108

岩崎卓也 1971「特集　シンポジューム五領式土器について」『台地研究』No. 19:45-62

岩崎卓也 1994「土器のひろがりと古墳の出現」『長野県考古学会誌 - 古墳時代特集号 - 』第 71・72 号 , 75-97

上田三平 1920『若狭及び越前に於ける古代遺跡』

宇賀神誠司 1988「長野県における古墳時代前期の地域的動向」『長野県埋蔵文化財センター紀要』2:15-24

宇都宮大学考古学研究会 1979『雀宮』

宇野隆夫 1995「前方後方形墳墓体制から前方後円墳体制へ - 東日本からみた日本国家の形成過程 - 」『西谷眞治先生古稀記念論文集』, 75-97

大村　直 2003「古墳時代集落出土の鉄製品」『考古資料大観』第 7 巻　小学館 , 344-348

小沢　洋 2000「房総の出現期古墳-神門古墳群と高部古墳群-」『大塚初重先生頌寿記念考古学論集』, 63-87

河村好光 1986「玉生産の展開と流通」『岩波講座日本考古学』第 3 巻　岩波書店 , 306-334

岸岡貴英 19991「京都府出土の装飾器台について」『京都府埋蔵文化財論集』第 2 集 , 39-48

楠　正勝 2003「装飾器台の成立と展開」『庄内式土器研究ＸＸⅥ』庄内式土器研究会 , 51-78

加納俊介 1990「Ｓ字甕とＳ字甕もどき」『マージナル』No. 10:19-28

京都府埋蔵文化財調査研究センター 1989『京都府弥生土器集成』

熊野正也 1974「特殊な器台形土器について (1)」『史館』第 3 号 , 102-112

熊野正也 1977「特殊な器台形土器について (2)」『史館』第 8 号 , 64-70

熊野正也 1980「特殊な器台形土器について (3)」『史館』第 12 号 , 29-43

小林健二 1991「甲府盆地におけるＳ字甕の定着について」『古文化談叢』第 26 集 , 151-166

佐原　真 1972「1971 の動向　弥生時代　追加」『考古学ジャーナル 5』ニューサイエンス社 , 21-23

設楽博己 1996「古墳出現前夜の北関東」『弥生人のくらし - 卑弥呼の時代の北関東 - 』, 53-56

鈴木直人 1994「特殊な土器の再検討（前編）」『史館』第 25 号 , 106-116

髙野陽子 2001「土器の交流 - 近畿北部と東海 - 」『第 9 回春日井シンポジウム資料集』

髙野陽子 2006「出現期前方後円墳をめぐる二、三の問題-京都府黒田古墳の再評価-」『京都府埋蔵文化財論集』第 5 集

高橋浩二 2002「北近畿系統の土器と山陰系統の土器 - 越中弥生後期・終末期における日本海沿岸交流の諸段階 - 」『富山大学人文学部紀要』vol.37:59-69

滝沢規朗 1993「越後における弥生後期以降の土器文様 - 凹線文系と刺突文を中心に - 」『北越考古学』第 6 号 , 1-15

滝沢規朗 2005「新潟県における古墳出現前後に盛行する装飾器台・結合器台について」『新潟考古』第 16, 77-96

田中新史 1977「市原市神門四号墳の出現とその系譜」『古代』第 63 号 , 1-21

玉口時雄 1971「古式土師器小考－福島県いわき市平原髙野遺跡調査報告－」『東洋大学紀要　文学部篇』第 25 集 , 243-262

栃木・宮本 1981「装飾性を帯びた器台形土器（いわゆる装飾器台）について」『金沢市文化財紀要 26』, 233-237

利根川章彦 1999「北陸系装飾器台の系譜についての小論 - いわゆる「特殊な器台」について - 」『研究紀要』第 15 号　埼玉県埋蔵文化財調査事業団 , 101-116

長瀬　出 2000「東京都豊島馬場遺跡における「方形周溝墓」の再検討」『法政考古学』第 26 集 , 1-26

野島・髙野 2002「近畿地方北部における古墳成立期の墳墓（3）」『京都府埋蔵文化財情報』第 83 号

野島　永 1992「破砕した鋳造鉄斧」『たたら研究』第 32・33 号 , 20-29

野島　永 1997「弥生・古墳時代の鉄器生産の一様相 」『たたら研究』第 38 号 , 1-34

野島・河野 2001「玉と鉄 -- 弥生時代玉作り技術と交易 」『古代文化』第 53 巻第 4 号 , 37-51

野島　永 2009「初期国家形成過程の鉄器文化の特質」『初期国家形成過程の鉄器文化』雄山閣 , 232-274

浜田晋介 1988「弥生時代後期の甲府盆地 - 異系統土器の相互交流とその様相 - 」『山梨県考古学協会誌』第 2 号

原田　幹 1994「Ｓ字甕の拡散からみた東海系土器の動向」『庄内式土器研究』Ⅴ :67-79

原田　幹 2002「中部地方の土器」『考古資料大観』第 2 巻　小学館 , 293-304

比田井克仁 1985「外来土器の展開 - 古墳時代前期の東京を中心として - 」『古代』第 78・79 合併号 , 14-39

比田井克仁 1987「南関東出土の北陸系土器について」『古代』第 83 号 , 45-82

比田井克仁 1993「東国における外来土器の展開」『翔古論集』71-102

比田井克仁 1995「下総地域の主体性」『法政考古学』第 21 集 , 61-83

比田井克仁 1997「定型化古墳出現前における濃尾 畿内と関東の確執 」『考古学研究』第 44 巻第 2 号 , 84-107

比田井克仁 2002「関東・東北地方南部の土器」『考古資料大観』第 2 巻　小学館 , 357-368

比田井克仁 2004「古墳時代前期における関東土器圏の北上」『史館』第 33 号 , 101-137

堀　大介 2009「装飾器台の成立」『地域政権の考古学的研究 - 古墳成立期の北陸を舞台として - 』雄山閣 , 250-255

宮本哲郎 1986「装飾器台等の展開」『シンポジウム「月影式」土器について』

村田健二 1982『篭田・鶴田』, 8-9

諸墨知義 1986「有透穴器台出土地名表 - 関東地方における古墳出現期の基礎的研究（1）- 」『うつわ』創刊号 , 21-35

《報告書》

山形県

山形県埋蔵文化財センター 1995『畑田遺跡　中野遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 22 集

宮城県

小牛田町教委 1976『山前遺跡』

仙台市 1982『南小泉遺跡 昭和 52 年度 － 第 61 次』仙台市文化財調査報告書 第 35 集

福島県

会津坂下町教委 1990『男壇遺跡・宮東遺跡・中西遺跡』

いわき市 2003『折返 A 遺跡・菅俣 B 遺跡』いわき市埋蔵文化財調査報告第 95 冊

茨城県

茨城県教育財団 1980『沖餅遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告Ⅲ

茨城県教育財団 1982『成沢遺跡・屋代 A 遺跡 . 』? 茨城県教育財団文化財調査報告ⅩⅣ

茨城県教育財団 1989『本田遺跡 ； 善長寺遺跡 ； 小田林遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告第 51 集

茨城県教育財団 1990?『北郷 C 遺跡 ； 森戸遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告第 55 集

茨城県教育財団 2000?『ニガサワ遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告第 169 集

茨城県教育財団 2004?『戸崎中山遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告第 218 集

茨城県教育財団 2005『薬師入遺跡』. 茨城県教育財団文化財調査報告第 239 集

茨城県教育財団 2008『薬師入遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告第 296 集

鹿島町 1978『鹿島神宮駅北部埋蔵文化財調査報告』? 鹿島町の文化財第 6 集

ひたちなか市 2008『? 鷹ノ巣』ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告第 37 集

栃木県

宇都宮市教育委員会 1990?『茂原古墳群』宇都宮市埋蔵文化財調査報告 28

栃木県教育委員会 1978『薬師寺南遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第 23 集

栃木県教育委員会 2001『八剣遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第 254 集

栃木県埋蔵文化振興事業団 1982『烏森遺跡発掘調査概報 ?』栃木県埋蔵文化財調査報告第 47 集

栃木県埋蔵文化振興事業団 1986『烏森遺跡 』栃木県埋蔵文化財調査報告第 80 集

栃木県埋蔵文化振興事業団 1995『猿渕遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第 155 集

栃木県埋蔵文化振興事業団 1997『寺野東遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第 201 集

栃木県埋蔵文化振興事業団 2000『杉村・磯岡・磯岡北』栃木県埋蔵文化財調査報告第 241 集

日本窯業史研究所 1989『宮の森集落遺跡群』

ひたちなか市 2008『八剣遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第 254 集

群馬県

太田市教委 1999『唐桶田遺跡発掘調査報告書』

群馬県企業局 1982『伊勢崎東流通団地遺跡』

群馬県企業局 1991『萱野遺跡・下田中遺跡・矢場遺跡』

群馬県教育委員会 1985『糸井宮前遺跡Ⅰ』

群馬県教育委員会 1985『荒砥前原遺跡・赤石城址』

群馬県教育委員会 1985『堤東遺跡』

群馬県教育委員会 1986『荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡』

群馬県教育委員会 1988『新保遺跡Ⅱ』

群馬県教育委員会 1990『下境Ⅰ・天神』

群馬県教育委員会 1992『上諏訪山 A・B・中山 A・東原 A・B』

群馬県教育委員会 1994『天神Ⅰ遺跡・天神Ⅱ遺跡・西原遺跡・松葉慈学寺遺跡』

群馬県教育委員会 2000『村主遺跡・谷津遺跡』

群馬県教育委員会 2001『北田下遺跡・中畑遺跡・中山 B 遺跡』

群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989『下佐野遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告 77

群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991『下淵名塚越遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書 114 集

群馬県埋蔵文化財調査事業団 1993『新保田中村前遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告 151 集

群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994『白倉下原・天引向原遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告 173 集

群馬県埋蔵文化財調査事業団 1995『荒砥上ノ坊遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告 193 集

群馬県埋蔵文化財調査事業団 2007『中居町一丁目遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告 398 集

高崎市遺跡調査会 1997『高崎情報団地遺跡』高崎市遺跡調査会文化財調査報告 55

高崎市教育委員会 1974『? 八幡原遺跡』高崎市文化財調査報告第 3 集

高崎市教育委員会 1994『倉賀野万福寺Ⅱ遺跡発掘調査報告書』

高崎市教育委員会 2002『高崎情報団地 II 遺跡』高崎市文化財調査報告書第 177 集

富岡市教委 1997『東八木遺跡、阿曽岡・権現堂遺跡』富岡市埋蔵文化財発掘調査報告第 24 集

新田町教委 2000『新田東部遺跡群Ⅱ』

前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1991『内堀遺跡群Ⅳ』

前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1992『横俵遺跡群Ⅳ』

前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1998『山王若宮遺跡』

前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1998『六供中京安寺遺跡・六供下堂木Ⅲ遺跡』

吉井町教委 1998『長根遺跡群発掘調査報告書Ⅴ』

埼玉県

大宮市遺跡調査会 1985『原遺跡』大宮市遺跡調査会報告第 12 集

江南町教育委員会 1998『埼玉県江南町千代遺跡群発掘調査報告書 2』

児玉町教委 1997『浅見境北遺跡』児玉町文化財調査報告書 23

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1971『諏訪山貝塚・諏訪山遺跡・桜山貝塚・南遺跡発掘調査報告』埼玉県遺跡調査会報告第 8 集

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1982『? 篭田・鶴田』. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 20 集

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1986『? 鍛冶谷・新田口遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 62 集

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1987『下道添遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 67 集

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1990『広面遺跡 ： 坂戸市』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 89 集

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1991『小敷田遺跡』

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1993?『中耕遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 125

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1994『稲荷台遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 139 集

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1994『稲荷前遺跡（B・C 区)』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 145 集

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1999『本庄市西富田・四方田条里遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 224 集

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2001『下野田稲荷原遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 263 集

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2005『北島遺跡 5』.

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2008『小林八束 1/ 小林八束 2 菖蒲町』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 356 集

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2009『反町遺跡 東松山市』. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 361 集

所沢市教育委員会 2003『宮前遺跡』所沢市埋蔵文化財調査報告書第 31 集

本庄市教育委員会 2006『金屋下別所遺跡 B 地点・塩谷平氏ノ宮遺跡・塩谷下大塚遺跡 E 地点』：本庄市埋蔵文化財調査報告書第 1 集

本庄市教育委員会 2010『北堀久下塚北遺跡 II ： B 地点 ； 久下東遺跡 IV ： C1・D1・E1 地点 ； 久下前遺跡 II ： A1・B1 地点』本庄市埋蔵文化財調査報告書第 19 集

美里村教委 1978『日の森遺跡』

千葉県

市原市教育委員会 1981『上総国分寺台発掘調査概報』

市原市教育委員会 2009『市原市南中台遺跡・荒久遺跡 A 地点』? 市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書 10 集

朝夷地区教育委員会 1989『小滝涼源寺』

市原市文化財センター 2004『市原市辺田古墳群・御林跡遺跡』市原市文化財センター調査報告書第 89 集

市原市文化財センター 2005『市原市根田代遺跡』

印旛町平賀遺跡調査団 1985『平賀遺跡』

印旛郡市文化財センター 2000『谷津堀遺跡 A・B・C 地点、タダメキ第 1 遺跡、タダメキ第 2 遺跡』印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第 156 集

印旛郡市文化財センター 2011『キサキ遺跡 ： 千葉県成田市』印旛郡市文化財センター発掘調査報告第 302 集

柏市遺跡調査団 2009『湖南台遺跡群』

柏市教育委員会 2006『不動山遺跡（第 2 次）； 不動山遺跡（第 7 次）； 一番割遺跡（第 2 次）； 今泉遺跡（第 2 次）； 一番割遺跡（第 4 次）； 一番割遺跡（第 8 次）： 千葉県柏市』

柏市教育委員会 2008『呼塚遺跡調査報告書 ： 千葉県柏市』柏市埋蔵文化財調査報告書 63

柏市教育委員会 2010『口遺跡 ： 千葉県柏市』柏市埋蔵文化財調査報告書 65

柏市教育委員会 2011『田中小遺跡（第 3 次）； 田中小遺跡（第 8 次）』千葉県柏市柏市埋蔵文化財調査報告書 68

柏町公民館 1952『戸張城山遺跡調査概報』

君津郡市考古資料刊行会 1996『常代遺跡群』

君津郡市文化財センター 1994『上大城遺跡発掘調査報告書』君津郡市文化財センター発掘調査報告書第 100 集

君津郡市文化財センター 2005『上大城遺跡』君津郡市文化財センター発掘調査報告書第 188 集

佐倉市大崎台 B 地区遺跡調査会 1986『大崎台遺跡発掘調査報告Ⅱ』

佐倉市大崎台 B 地区遺跡調査会 1987『大崎台遺跡発掘調査報告Ⅲ』

山武考古学研究所 1985『戸張一番割遺跡』

袖ヶ浦市教育委員会 1998『山王台遺跡・下向山遺跡』

袖ヶ浦市教育委員会 1999『西原遺跡』市内遺跡発掘調査報告書Ⅱ

千葉県土地開発公社 1975『阿玉台北遺跡』

千葉県教育委員会 1961『印旛・手賀沼周辺埋蔵文化財調査』

千葉県教育振興財団 2006『流山市　市野谷宮尻遺跡』千葉県教育振興財団調査報告第 545 集

千葉県教育振興財団 2006『市原市草刈遺跡（D 区・E 区）』千葉県教育振興財団調査報告第 535 集

千葉市教育振興財団 2007『下泉町遺跡群』

千葉県文化財センター 1979『千葉県城の越遺跡』

千葉県文化財センター 1983『千原台ニュータウンⅡ』

千葉県文化財センター 1984『千葉東南部ニュータウン 15 』

千葉県文化財センター 1991『泉北側第 2 遺跡』千葉県文化財センター調査報告第 190 集

千葉県文化財調査協会 2001『千葉市うならすず遺跡』

富津市 1992『打越遺跡・神明山遺跡 ： 千葉県富津市 ； 打越遺跡遺物編， 打越遺跡本文編・神明山遺跡編』君津郡市文化財センター発掘調査報告書第 64 集

富津市 1994『尾畑台遺跡・内出原遺跡・大竹古墳群・下根岸古墳群 ： 千葉県袖ケ浦市』君津郡市文化財センター発掘調査報告書第 91 集

長生郡市文化財センター 1993『国府関遺跡群 ： 千葉県茂原市』長生郡市文化財センター調査報告第 15 集

南山遺跡調査会 1982『南山遺跡』

船橋市西ノ台遺跡調査団 1985『船橋市西ノ台遺跡』

八千代市遺跡調査会 2006『勝田大作遺跡』

東京都

足立区伊興遺跡調査会 1996『舎人遺跡』

葛西城址調査会 1983『葛西城』

北区教委 1995『豊島馬場遺跡』北区埋蔵文化財調査報告 16 集

北区教委 1999『豊島馬場遺跡』北区埋蔵文化財調査報告第 25 集

共和開発株式会社 2007『前野兎谷遺跡第 2 地点発掘調査報告書』

東京都教育委員会 1987『江戸川区上小岩遺跡』東京都埋蔵文化財報告第 14 集

東京都埋蔵文化財センター 1995『多摩ニュータウン遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告第 19 集

東京都埋蔵文化財センター 2012『氷川遺跡』

東洋大学 2004『原町東遺跡』

八幡原遺跡調査団 1984『八幡原遺跡の発掘』

日野市遺跡調査会 1986『平山遺跡』日野市埋蔵文化財発掘調査報告 2

神奈川県

間門遺跡調査団 1994『間門遺跡』

かながわ考古学財団 1999『御屋敷添遺跡 ： 第 3 地点 （No. 1） 第 4 地点 （No. 2 ） 第 5 地点 （No. 44） ； 高森・一ノ崎遺跡 （No. 37） ； 高森・窪谷遺跡 （No. 3） ： 厚木・伊勢原市内』かながわ考古学財団調査報告 44

かながわ考古学財団 1999『鉾ノ木遺跡 （No. 27） ： 秦野市内』かながわ考古学財団調査報告 54

県営三枚町団地予定地内遺跡発掘調査団 1988『三枚町遺跡発掘調査報告書』

玉川文化財研究所 2003『羽根尾横穴墓群と周辺遺跡』

玉川文化財研究所 2006『新羽南遺跡・新羽南古墳』

中央大学考古学研究会 1971『上谷本第二遺跡 A 地区・B 地区発掘調査概報』

東海第学出版会 2000『王子ノ台遺跡　第三巻』

なすな原遺跡調査会 1981『なすな原遺跡』

No.86 根岸 B 遺跡発掘調査団　1999『No.86 根岸 B 遺跡発掘調査報告書』

日本窯業史研究所 1988『御所ヶ谷遺跡』

日本窯業史研究所 2003『寺下遺跡』

横須賀市教委 1982『長井町内原遺跡』横須賀市文化財調査報告書第 9 集

横須賀市教委 1994『小荷谷遺跡』横須賀市埋蔵文化財調査報告書第 3 集

横須賀市教委 2000『長井台地遺跡群内原遺跡 ?』横須賀市埋蔵文化財調査報告書　第 8 集

横浜市教育委員会 2007『港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告 39』

新潟県

加治川村教育委員会 2004『野中土手付遺跡』加治川村埋蔵文化財調査報告書第 3 集

黒崎町教育委員会 1979『緒立遺跡』

黒崎町教育委員会 1979『緒立 C 遺跡』

聖籠町教育委員会 1993『二本松東山遺跡』

十日町市教育委員会 2001『道端 A・B 遺跡発掘調査概要報告書』十日町市埋蔵文化財発掘調査報告書 20 集

中条町教育委員会 2002『大塚遺跡　新潟県北蒲原郡中条町　第 2 次，第 3 次』中条町埋蔵文化財調査報告第 23 集

新潟県教育委員会 1989『山三賀 II 遺跡』? 新潟県埋蔵文化財調査報告書第 53 集

新潟県教育委員会 1994『一之口遺跡　西地区　東地区』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 60 集

新潟県教育委員会 2001『新保遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 103 集

新潟県教育委員会 2001『正尺 A 遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 107 集

新潟県教育委員会 2004『下割遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 134 集

新潟県教育委員会 2005『西川内北遺跡　西川内南遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 146 集

新潟市教育委員会 1993『新潟市的場遺跡』

巻町教育委員会 2002『南赤坂遺跡』

巻町教育委員会 2004『御井戸遺跡Ⅱ』

富山県

小矢部市 2 教育委員会 003『桜町遺跡発掘調査報告書　富山県小矢部市』小矢部市埋蔵文化財調査報告書第 51 冊

富山県文化振興財団 2010『惣領浦之前遺跡　惣領野際遺跡発掘調査報告』富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第 45 集

富山市教育委員会 1996『野田・平榎遺跡・野中新長幅遺跡・宮条南遺跡・高島島浦遺跡』

富山市教育委員会 2004『打出遺跡』富山市埋蔵文化財調査報告 138

富山市教育委員会 2007『打出遺跡』富山市埋蔵文化財調査報告 7

富山市教育委員会 2008『富崎遺跡』富山市埋蔵文化財調査報告 21-（2）

福井県

あわら市教育委員会 2001『南稲越遺跡』あわら市埋蔵文化財調査報告 1

山梨県

韮崎市教育委員会 1988『坂井南』

山梨県埋蔵文化財センター 1987『姥塚遺跡 姥塚無名墳』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第 24 集

山梨県埋蔵文化財センター 1995『榎田遺跡 山梨県甲府市』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 105 集

山梨県埋蔵文化財センター 1996『塩部遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第 123 集

山梨県埋蔵文化財センター 1997『村前東 A 遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第 157 集

山梨県埋蔵文化財センター 2002『久保田 道々芽木遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第 197 集

長野県

上山田町教育委員会 1994『御屋敷遺跡』

塩尻市教育委員会 1987『平出遺跡』

長野市教育委員会 1988『町川田遺跡』長野市の埋蔵文化財第 31 集

松本市教育委員会 1990『松本市向畑遺跡Ⅲ』

松本市教育委員会 1992『松本市　堀の内遺跡』

御代田町教育委員会 1987『前田遺跡』

岐阜県

可児郡可児町教育委員会 1976『宮之脇遺跡発掘調査報告書』

岐阜県教育文化財団文化財保護センター 2005『柿田遺跡』岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告 92

岐阜市教育委員会 1990『城之内遺跡』岐阜市文化財報告 1990-1

静岡県

静岡県埋蔵文化財調査研究所 1993『新堀遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第 45 集

静岡県埋蔵文化財調査研究所 1995『長崎遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第 59 集

静岡県埋蔵文化財調査研究所 1999『元島遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第 116 集

浜松市文化協会 2004『大浦村東Ⅰ・Ⅱ遺跡』

富士市教育委員会 1983『三新田遺跡発掘調査報告書』

富士宮市教育委員会 1981『月の輪遺跡群』

三島市教育委員会 2000『夏梅木遺跡群』

焼津市教育委員会 1982『小深田遺跡』焼津市埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ

愛知県

愛知県埋蔵文化財センター 1994『朝日遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 34 集

愛知県埋蔵文化財センター 2008『惣作・鐘場遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 150 集

豊橋市教育委員会 2007『瓜郷』豊橋市埋蔵文化財調査報告書第 93 集

名古屋市教育委員会 1999『三王山遺跡』？名古屋市文化財調査報告 40

滋賀県

長浜市教育委員会 1996『上寺地遺跡・北郷里小遺跡・法性寺遺跡・墓立遺跡』長浜市埋蔵文化財調査資料第 15 集

図の出典

図 1　1、西谷墳墓群：京都府埋蔵文化財調査研究センター 1989　2、清間遺跡：あわら市 2001　3、下淵名塚越遺跡：群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991　4、辺田古墳群：市原市文化財センター 2004　5、榎田遺跡：山梨県埋蔵文化財センター 1995　6、雀宮：宇都宮大学考古学研究会 1979　7、西川内南遺跡：新潟県教委 2005　8、中耕遺跡：埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1993　9、下田中遺跡：群馬県企業局 1991　10、広面遺跡：埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1990　11、東原 B 遺跡：群馬県教委 1992　12、原町東遺跡：東洋大学 2004　13、荒砥北原遺跡：群馬県教委 1986　14、前田遺跡：御代田町教委 1987

図 2　広面遺跡：埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1990

図 3　1、田中小遺跡：柏市教育委員会 2011　2、城之内遺跡：岐阜市教委 1990　3、八剣遺跡：栃木県埋蔵文化財調査センター 2001　4、塩谷平氏ノ宮遺跡：本庄市教育委員会 2006　5、南小泉遺跡：仙台市教育委員会　1982　6、西谷墳墓群：京都府埋蔵文化財調査研究センター 1989　7、阿玉台北遺跡：千葉県土地開発公社 1975　8、戸張一番割遺跡：山武考古学研究所 1985　9、西川内南遺跡：新潟県埋蔵文化財センター 2005　10、八剣遺跡：栃木県埋蔵文化財調査センター 2001　11、長井内原遺跡：横須賀市教委 1982

図 4・5　筆者作成

図 6　赤塚 1992 より引用

図 7 ～ 19　別表（遺跡一覧）参照

高坏状装飾器台出土遺跡一覧

遺跡名	出土遺構	細別	受部	盃部	報告書
宮城県					
南小泉遺跡（仙台市）		Ⅴ F	Ⅴ	F	仙台市 1982
山前遺跡（遠田郡美里町：旧小牛田町域）		Ⅲ E4	Ⅲ	E	小牛田町教委 1976
山形県					
畑田遺跡（鶴岡市）	SD101・SD249	Ⅲ D2	欠損	D	山形県埋蔵文化財センター 1995
畑田遺跡（鶴岡市）	SD101・SD249	Ⅲ D2	欠損	D	同上
畑田遺跡（鶴岡市）	SD101・SD249	Ⅲ E	欠損	E	同上
畑田遺跡（鶴岡市）	遺構外出土	Ⅲ F	Ⅲ	F	同上
福島県					
中西遺跡（会津坂下町）	第 4 号住居跡	Ⅳ F	Ⅳ	F	会津坂下町教委 1990
中西遺跡（会津坂下町）	第 7 号住居跡	Ⅳ F	Ⅳ	F	同上
菅俣 B 遺跡（いわき市）	2 区第 16 号住居跡	Ⅲ D2	欠損	D	いわき市 2003
元屋敷遺跡（浪江町）	第 3 号住居跡	Ⅲ D2	Ⅲ	D	福島県考古学会 1976
茨城県					
薬師入遺跡（阿見町）	第 8 号住居	Ⅳ F3	Ⅳ	F	茨城県教育財団 2005・2008
薬師入遺跡（阿見町）	第 106 号住居	Ⅳ F2	Ⅳ	F	同上
薬師入遺跡（阿見町）	第 74 号住居跡	Ⅳ F1	欠損	F	同上
薬師入遺跡（阿見町）	第 98 号住居跡	Ⅳ F1	Ⅳ	F	同上
薬師入遺跡（阿見町）	第 101 号住居跡	Ⅳ F1	Ⅳ	欠損	同上
屋代 A 遺跡（竜ヶ崎市）	第 15 号住居跡	Ⅳ E	欠損	E	茨城県教育財団 1982
屋代 A 遺跡（竜ヶ崎市）	第 45 号住居跡	Ⅳ F1	Ⅳ	F	同上
沖餅遺跡（竜ヶ崎市）	第 4 号住居址	Ⅳ E1	Ⅳ	E	茨城県教育財団 1980
善長寺遺跡（結城市）	第 25 号住居址	Ⅲ D2	Ⅲ	D	茨城県教育財団 1989
小田林遺跡（結城市）	第 27 号住居址	Ⅲ F	欠損	F	茨城県教育財団 1989
戸崎中山遺跡（かすみがうら市：旧霞ヶ浦町）	第 67 号住居跡	Ⅳ E2	欠損	E	茨城県教育財団 2004
戸崎中山遺跡（かすみがうら市：旧霞ヶ浦町）	第 73 号住居跡	Ⅳ E2	Ⅳ	E	同上
木滝台遺跡（鹿島町）	044 －Ｘ区	Ⅲ F4	Ⅲ	F	鹿島町 1978
木滝台遺跡（鹿島町）	044 －Ｘ区	Ⅲ F4	Ⅲ	F	同上
森戸遺跡（那珂市：旧那珂町）	豪族居館跡東西堀下層	Ⅲ F2	欠損	F	茨城県教育財団 1990
森戸遺跡（那珂市：旧那珂町）	豪族居館跡東西堀下層	Ⅳ E1	欠損	E	同上
ニガサワ遺跡（水戸市）	遺構外出土	Ⅲ E	欠損	E	茨城県教育財団 2000
鷹ノ巣遺跡（ひたちなか市）	第 41 号住居跡	Ⅲ E2	Ⅲ	E	ひたちなか市 2008
栃木県					
八剣遺跡（壬生町）	SI － 18		欠損	欠損	ひたちなか市 2008
八剣遺跡（壬生町）	SI － 42	Ⅳ E2	Ⅳ	E	同上
八剣遺跡（壬生町）	SI － 42	Ⅲ E3	Ⅲ	D	同上
八剣遺跡（壬生町）	SI － 51	Ⅲ E4	Ⅲ	D	同上
八剣遺跡（壬生町）	SI － 56		欠損	欠損	同上
八剣遺跡（壬生町）	SI － 67	Ⅲ E2	Ⅲ	欠損	同上
八剣遺跡（壬生町）	SX － 01	Ⅳ E1	Ⅳ	E	同上
八剣遺跡（壬生町）	SX － 01		欠損	D	同上
上原東遺跡（壬生町）	KT － 13		欠損	D	日本窯業史研究所 1989
寺野東遺跡（小山市）	SI057	Ⅲ E2	Ⅲ	D	栃木県埋蔵文化振興事業団 1997

寺野東遺跡（小山市）	SI145	Ⅲ F2	Ⅲ	F	同上
寺野東遺跡（小山市）	SI145	Ⅲ E2	Ⅲ	D	同上
寺野東遺跡（小山市）	SI145	Ⅲ F1	Ⅲ	F	同上
寺野東遺跡（小山市）	SI151		欠損	D	同上
烏森遺跡（下野市：旧国分寺町）	SI001	Ⅲ E2	Ⅲ	D	栃木県埋蔵文化振興事業団 1982・1986
烏森遺跡（下野市：旧国分寺町）	SI007	Ⅲ E2	Ⅲ	D	同上
雀宮（宇都宮市）		Ⅱ C	Ⅱ	C	宇都宮大学考古学研究室 1979
猿渕遺跡（大平町）	SI －1	Ⅲ D1	Ⅲ	D	栃木県埋蔵文化振興事業団 1995
薬師寺南（河内町）	11 号住居跡	Ⅳ E1	Ⅳ	E	栃木県教委 1978
群馬県					
下佐野遺跡（高崎市）	6 号方形周溝墓	Ⅲ E2	Ⅲ	欠損	群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989
下佐野遺跡（高崎市）	Ⅰ地区 A 区Ⅹ号方形周溝墓		欠損	欠損	同上
下佐野遺跡（高崎市）	Ⅰ地区 C 区 10 号住居跡	Ⅲ E2	欠損	E	同上
下佐野遺跡（高崎市）	Ⅰ地区 B 区 12A 号住居跡	Ⅲ D	Ⅲ	D	同上
下佐野遺跡（高崎市）	Ⅰ地区 A 区 72 号住居跡	Ⅲ E	Ⅲ	欠損	同上
高崎情報団地遺跡（高崎市）	67 号住居址	Ⅲ E2	欠損	E	高崎市遺跡調査会 1997・高崎市教委 2002
高崎情報団地遺跡（高崎市）	68 号住居址	Ⅳ F	Ⅳ	F	同上
高崎情報団地遺跡（高崎市）	11 区 SD99		欠損	E	同上
高崎情報団地遺跡（高崎市）	16 区 SD99	Ⅲ E2	Ⅲ	E	同上
高崎情報団地遺跡（高崎市）	16 区 SD99	Ⅲ D	Ⅲ	D	同上
新保田中村前遺跡（高崎市）	2 号周溝墓	Ⅲ D2	Ⅲ	D	群馬県埋蔵文化財調査事業団 1993
新保田中村前遺跡（高崎市）	8 号周溝墓	Ⅲ E2	Ⅲ	E	同上
倉賀野万福寺Ⅱ遺跡（高崎市）	第 21 号方形周溝墓	Ⅲ F	欠損	F	高崎市教委 1994
八幡原遺跡（高崎市）	掘り込み遺構	Ⅲ F2	Ⅲ	F	高崎市教委 1974
新保遺跡（高崎市）	186 号住居	Ⅲ F2	欠損	F	群馬県教委 1988
仲居町一丁目遺跡（高崎市）	第 10 号住居	Ⅲ E	欠損	E	群馬県埋蔵文化財調査事業団 2007
内堀遺跡（前橋市）	H － 49 号住居址	Ⅳ F3	Ⅳ	F	前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1991
内堀遺跡（前橋市）	H － 49 号住居址	Ⅲ E	欠損	E	同上
横俵遺跡（前橋市）	H － 2	Ⅲ F	Ⅲ	F	前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1992
横俵遺跡（前橋市）	H － 21B	Ⅲ F4	Ⅲ	F	同上
六供中京安寺遺跡（前橋市）	表採	Ⅲ E2	欠損	E	前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1998
山王若宮遺跡（前橋市）		Ⅱ B3	欠損	B	前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1998
村主遺跡（前橋市）	第 2 号住居跡	Ⅲ F1	Ⅲ	F	群馬県教委 2000
中山 B 遺跡（前橋市）	27 号住居		欠損	E	群馬県教委 2001
下境Ⅰ遺跡（前橋市）	9 号住居址	Ⅲ F1	Ⅲ	F	群馬県教委 1990
堤東遺跡（前橋市）	2 号周溝墓	Ⅲ E	欠損	E	群馬県教委 1985
東原 B 遺跡（前橋市）	第 35 号住居	Ⅲ F2	Ⅲ	F	群馬県教委 1992
荒砥上ノ坊遺跡（前橋市）	2 区 67 号住居	Ⅲ F2	欠損	F	群馬県埋蔵文化財調査事業団 1995
荒砥北原遺跡（前橋市）	第 1 号方形周溝墓	Ⅳ F3	Ⅳ	F	群馬県教委 1986
荒砥前原遺跡（前橋市）	C 区 2 号住居	Ⅲ E4	Ⅲ	E	群馬県教委 1985
唐桶田遺跡（太田市）	第 16 号住居址	Ⅲ E2	Ⅲ	E	太田市教委 1999
下田中遺跡（太田市：旧新田町）	11 号住居址	Ⅲ D3	Ⅲ	D	群馬県企業局 1991
一本杉Ⅱ遺跡（太田市：旧新田町）	30 号溝 A － 2	Ⅲ E	欠損	E	新田町教委 2000

白倉下原・天引向原遺跡（甘楽町）	25 号住居	Ⅲ F1	Ⅲ	F	群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994
長根遺跡（吉井町）	19 号住居	Ⅲ E	Ⅲ	E	群馬県多野郡吉井町教委 1998
長根遺跡（吉井町）	26・32 号住居	Ⅲ C	欠損	C	同上
下淵名塚越遺跡（伊勢崎市：旧境町）	Ⅳ 2 号住居	Ⅰ A	Ⅰ	A	群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991
下淵名塚越遺跡（伊勢崎市：旧境町）	Ⅳ 2 号住居	Ⅲ E	欠損	E	同上
西原遺跡（甘楽町）	27 号住居	Ⅳ F1	Ⅳ	F	群馬県教委 1994
阿曽岡・権現堂遺跡（富岡市）	Ⅲ 区 143 号住居跡	Ⅲ F2	Ⅲ	F	富岡市教委 1997
糸井宮前遺跡（昭和村）	第 148 号住居址	Ⅲ E1	Ⅲ	E	群馬県教委 1985
埼玉県					
久下前 A1 遺跡（本庄市）	河川跡	Ⅳ F3	Ⅳ	F	本庄市教育委員会 2010
久下前 A1 遺跡（本庄市）	河川跡	Ⅳ F3	Ⅳ	F	同上
久下前 A1 遺跡（本庄市）	河川跡	Ⅲ F	Ⅲ	F	同上
久下前 A1 遺跡（本庄市）	河川跡	Ⅲ E2	欠損	e	同上
久下前 A1 遺跡（本庄市）	河川跡	Ⅲ E2	欠損	e	同上
塩谷平氏ノ宮遺跡（本庄市）	第 7 号住居跡	Ⅳ E1	Ⅳ	欠損	本庄市教育委員会 2006
西富田・四方田条里遺跡（本庄市）	第 2 号住居跡	Ⅳ E1	欠損	e	埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1999
中耕遺跡（坂戸市）	第 32 号方形周溝墓	Ⅲ C	Ⅲ	C	埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1993
中耕遺跡（坂戸市）	第 42 号方形周溝墓	Ⅲ E1	Ⅲ	E	同上
中耕遺跡（坂戸市）	第 42 号方形周溝墓	Ⅲ E2	Ⅲ	E	同上
広面遺跡（坂戸市）	SZ18	Ⅲ E2	Ⅲ	E	埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1990
稲荷前遺跡（坂戸市）	C 区第 1 号方形周溝墓	Ⅲ E1	Ⅲ	E	埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1994
下道添遺跡（東松山市）	13 号墓	Ⅲ E1	Ⅲ	E	埼玉県埋蔵文化財調査事業団
下道添遺跡（東松山市）	第 11 号住居跡	Ⅲ E3	Ⅲ	E	同上
反町遺跡（東松山市）	第 48 号溝跡	Ⅲ E2	Ⅲ	e	埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2009
反町遺跡（東松山市）	第 48 号溝跡	Ⅲ D3	欠損	d	同上
篭田遺跡（東松山市）	表採	Ⅲ E2	Ⅲ	E	埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1982
諏訪山遺跡（さいたま市：旧岩槻市）	第 7 号住居址	Ⅲ E	欠損	E	埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1971
諏訪山遺跡（さいたま市：旧岩槻市）	第 34 号住居址	Ⅲ E3	Ⅲ	E	同上
原遺跡（さいたま市：旧大宮市）	第 3 号住居跡	Ⅱ B2	欠損	B	大宮市遺跡調査会 1985
下野田稲荷原遺跡（さいたま市：旧浦和市）	第 34 号住居跡	Ⅲ D3	欠損	d	埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2001
鍛冶谷・新田口遺跡（戸田市）	第 27 号方形周溝墓	Ⅳ F3	Ⅳ	F	埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1986
鍛冶谷・新田口遺跡（戸田市）	A 区 2 号包含層	Ⅲ E	欠損	E	同上
鍛冶谷・新田口遺跡（戸田市）	A 区 2 号包含層	Ⅳ E2	Ⅳ	E	同上
鍛冶谷・新田口遺跡（戸田市）	A 区 2 号包含層		欠損	F	同上
小敷田遺跡（行田市）	5 区河川跡	Ⅲ F2	Ⅲ	F	埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1991
小敷田遺跡（行田市）	5 区河川跡	Ⅳ F3	欠損	F	同上
小敷田遺跡（行田市）	5 区河川跡		Ⅲ	F	同上
北島遺跡（熊谷市）	第 464 号溝跡	Ⅰ A	Ⅰ	a	埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2005
北島遺跡（熊谷市）	第 223 号住居跡	Ⅳ F1	Ⅳ	欠損	同上
北島遺跡（熊谷市）	第 339 号住居跡	Ⅲ E2	Ⅲ	e	同上
稲荷台遺跡（上尾市）	第 55 号住居跡	Ⅲ E1	Ⅲ	E	埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1994
小林八束 1 遺跡（菖蒲町）	第 10 号住居跡	Ⅰ A	Ⅰ	a	埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2008
姥ヶ沢遺跡（江南町）	第 19 号住居跡	Ⅲ E3	Ⅲ	e	江南町教育委員会 1998
宮前遺跡（所沢市）	第 130 号住居跡	Ⅲ E2	Ⅲ	e	所沢市教育委員会 2003

千葉県					
田中小遺跡（柏市）	10 号住居跡	Ⅲ E1	Ⅲ	e	柏市教育委員会 2011
田中小遺跡（柏市）	10 号住居跡	Ⅲ E1	Ⅲ	D	同上
田中小遺跡（柏市）	11 号住居跡	Ⅲ F1	Ⅲ	f	同上
田中小遺跡（柏市）	18 号住居跡	Ⅰ A か	Ⅰ	a	同上
呼塚遺跡（柏市）	1 号住居跡	Ⅳ E	Ⅳ	e	柏市教育委員会 2008
呼塚遺跡（柏市）	8 号住居跡	Ⅲ E	欠損	e	同上
呼塚遺跡（柏市）	14 号住居跡	Ⅲ E	欠損	e	同上
呼塚遺跡（柏市）	18 号住居跡	Ⅲ E	欠損	e	同上
戸張一番割遺跡（柏市）	5 号住居跡	Ⅱ C	Ⅱ	c	山武考古学研究所 1985
戸張一番割遺跡（柏市）	11 号住居跡	Ⅲ D2	Ⅲ	D	同上
戸張一番割遺跡（柏市）	13 号住居跡	Ⅳ F4	Ⅳ	f	同上
戸張一番割遺跡（柏市）	28 号住居跡	Ⅲ C	Ⅲ	c	同上
四条前遺跡（柏市：旧沼南村）	1 号住居址	Ⅲ E2	欠損	E	千葉県教委 1961
四条前遺跡（柏市：旧沼南村）	1 号住居址	Ⅲ E2	欠損	E	同上
四条前遺跡（柏市：旧沼南村）	1 号住居址	Ⅲ E2	欠損	E	同上
一番割遺跡（柏市）	2 号住居跡	Ⅰ A	Ⅰ	e	柏市教育委員会 2006
一番割遺跡（柏市）	10 号住居跡	Ⅲ E	Ⅲ	e	同上
一番割遺跡（柏市）	1 号濠	Ⅳ E	Ⅳ	e	同上
岩井出口遺跡（柏市）	SI19 住居跡	Ⅲ E	Ⅲ	e	柏市遺跡調査団 2009
柏口遺跡（柏市）	遺構外	Ⅲ E	欠損	e	柏市教育委員会 2010
上大城遺跡（袖ヶ浦市）	遺構外	Ⅲ E	欠損	e	君津郡市文化財センター 1994
上大城遺跡（袖ヶ浦市）	85 号住居	Ⅳ F4	Ⅳ	f	同上
上大城遺跡（袖ヶ浦市）	77 号住居	Ⅳ E1	Ⅳ	e	同上
尾畑台遺跡（袖ヶ浦市）	第 2 地点 SI002	Ⅲ E2	Ⅲ	e	富津市 1994
尾畑台遺跡（袖ヶ浦市）	第 2 地点 SI006	Ⅲ E2	Ⅲ	e	同上
西原遺跡（袖ヶ浦市）	遺物集中地点	Ⅲ E2	Ⅲ	e	袖ヶ浦市教育委員会 1999
山王台遺跡（袖ヶ浦市）	SA019	Ⅳ F1	Ⅳ	f	袖ヶ浦市教育委員会 1998
草刈遺跡（市原市）	A 区遺構外出土	Ⅳ F1	Ⅳ	F	千葉県教育振興財団 2006
草刈遺跡（市原市）	D035A	Ⅳ F3	Ⅳ	f	同上
草刈遺跡（市原市）	E046	Ⅲ E	Ⅲ	e	同上
南中台遺跡（市原市）	SI27	Ⅳ E2	Ⅳ	e	市原市教育委員会 2009
南中台遺跡（市原市）	SI45	Ⅳ E2	Ⅳ	e	同上
辺田古墳群（市原市）	130 号遺構	Ⅰ E	Ⅰ	e	市原市文化財センター 2004
根田代遺跡（市原市）	2 号　墳（281 号墳）	Ⅲ E1	Ⅲ	e	市原市文化財センター 2005
泉北側第 2 遺跡（印西市）	010 号住居跡	不明	欠損	欠損	千葉県文化財センター 1991
泉北側第 2 遺跡（印西市）	013 号住居跡	Ⅳ E1	Ⅳ	e	同上
泉北側第 2 遺跡（印西市）	020 号住居跡	Ⅳ E1	Ⅳ	e	同上
泉北側第 2 遺跡（印西市）	034 号住居跡	Ⅳ E1	Ⅳ	e	同上
泉北側第 2 遺跡（印西市）	040 号住居跡	Ⅲ E	欠損	e	同上
南山遺跡（印西市）	B 地点 1 号住居跡	Ⅲ D2	Ⅲ	D	南山遺跡調査会 1982
城の越遺跡（千葉市）	129 号跡	Ⅳ F1	Ⅳ	F	千葉県文化財センター 1979
馬ノ口遺跡（千葉市）	13 号住居址	Ⅳ F4	Ⅳ	f	千葉県文化財センター 1984
うならすず遺跡（千葉市）	1 号住居跡	Ⅲ E2	Ⅲ	e	千葉県文化財調査協会 2001
上谷津第 1 遺跡（千葉市）	16 号住居跡	Ⅲ E1	Ⅲ	e	千葉市教育振興財団 2007
国府関遺跡群（茂原市）	包含層	Ⅱ D3	Ⅱ	欠損	長生郡市文化財センター 1993
国府関遺跡群（茂原市）	自然流路	Ⅱ D3	欠損	D	同上
国府関遺跡群（茂原市）	自然流路	Ⅱ B1	欠損	B	同上
国府関遺跡群（茂原市）	自然流路	Ⅲ E	欠損	E	同上
南羽鳥タダメキ第 2 遺跡（成田市）	3 号住居跡	Ⅲ E1	Ⅲ	e	印旛郡市文化財センター 2000

キサキ（成田市）	第5地点11号住居跡	ⅢE	Ⅲ	e	印旛郡市文化財センター 2011
市野谷宮尻遺跡（流山市）	SI027	ⅢE2	Ⅲ	e	千葉県教育振興財団 2006
市野谷宮尻遺跡（流山市）	SI065	ⅢE1	Ⅲ	e	同上
平賀遺跡（印旛村）	第28号住居址	ⅢF2	Ⅲ	F	印旛町平賀遺跡調査団 1985
平賀遺跡（印旛村）	第38号住居址	ⅣF	Ⅳ	F	同上
大崎台遺跡（佐倉市）	第13号方形周溝墓	ⅡC	欠損	C	佐倉市大崎台B地区遺跡調査会 1986
大崎台遺跡（佐倉市）	第430号住居址	ⅣF1	Ⅳ	F	同上
常代遺跡（君津市）	SK一213a	ⅣE1	Ⅲ	e	君津郡市考古資料刊行会 1996
常代遺跡（君津市）	SK-214	ⅢE2	Ⅲ	D	同上
小滝涼源寺（南房総市：旧白浜町）	SX01	ⅢD2	Ⅲ	D	朝夷地区教育委員会 1989
小滝涼源寺（南房総市：旧白浜町）	SX02	ⅢE2	Ⅲ	e	同上
阿玉台北遺跡（香取市：旧小見川町）	遺構外出土	ⅡB1	欠損	B	千葉県土地開発公社 1975
勝田大作遺跡（八千代市）	12号住居跡	ⅢF4	Ⅲ	f	八千代市遺跡調査会 2006
大堀遺跡（富津市）		ⅡD1	Ⅱ	D	東京考古学会 1965
東京都					
豊島馬場遺跡（北区）	SH09	ⅢE3	Ⅲ	E	北区教委 1995・1999
豊島馬場遺跡（北区）	SH12	ⅢE3	Ⅲ	E	同上
豊島馬場遺跡（北区）	SH18	ⅢE3	Ⅲ	E	同上
豊島馬場遺跡（北区）	SH25	ⅢF4	Ⅲ	F	同上
八幡原遺跡（北区）	H-4号住居址	ⅢE1	Ⅲ	E	八幡原遺跡調査団 1984
原町東遺跡（文京区）	SI5	ⅣE1	Ⅳ	E	東洋大学 2004
舎人遺跡（足立区）	49G-1号土坑		欠損	欠損	足立区伊興遺跡調査会 1996
葛西城址（葛飾区）		ⅢE3	Ⅲ	E	葛西城址調査会 1983
上小岩遺跡（江戸川区）	収蔵資料	ⅢE2	欠損	E	東京都教委 1987
前野兎谷遺跡（板橋区）	6号住居跡	ⅢF4	Ⅲ	F	共和開発株式会社 2007
平山遺跡（日野市）	第4号住居址	ⅣE	欠損	E	日野市遺跡調査会 1986
多摩ニュータウン遺跡（多摩市）	第14号住居跡	ⅣF4	Ⅳ	F	東京都埋蔵文化財センター 1995
神奈川県					
上谷本第2遺跡（横浜市）	A地区22号址	ⅣE1	Ⅳ	E	中央大学考古学研究会 1971
なすな原遺跡（横浜市）	第2号住居址	ⅣF4	Ⅳ	F	なすな原遺跡調査会 1981
新羽南古墳（横浜市）	墳丘	ⅣF3	Ⅳ	F	玉川文化財研究所 2006
北川貝塚（横浜市）	表採	ⅣF4	Ⅳ	F	横浜市教育委員会 2007
三枚町遺跡（横浜市）	第7号住居跡	ⅣE2	欠損	e	県営三枚町団地予定地内遺跡発掘調査団 1988
寺下遺跡（横浜市）	土器集中	ⅢE1	Ⅲ	E	日本窯業史研究所 2003
長井町内原遺跡（横須賀市）	第2号住居址	ⅢE2	Ⅲ	E	横須賀市教委 1982
長井町内原遺跡（横須賀市）	第16号住居址	ⅢE	欠損	E	同上
小荷谷遺跡（横須賀市）	SD01	ⅢD	欠損	D	横須賀市教委 1994
小荷谷遺跡（横須賀市）	SD01	ⅢF4	Ⅲ	F	同上
池子遺跡群（逗子市）	第1号溝状遺構 CIX66・67	ⅣF3	Ⅳ	F	かながわ考古学財団 1999
池子遺跡群（逗子市）	第1号溝状遺構 CIX66	ⅢF	Ⅲ	F	同上
池子遺跡群（逗子市）	包含層	ⅢF	Ⅲ	F	同上
御所ヶ谷遺跡（平塚市）	円形周溝墓	ⅣF4	Ⅳ	F	日本窯業史研究所 1988
No.86根岸B遺跡（平塚市）	遺構外出土	ⅣF	Ⅳ	F	No.86根岸B遺跡発掘調査団 1999
間門遺跡（鎌倉市：旧葉山町）	12号住居址	ⅣF	Ⅳ	F	間門遺跡調査団 1994
鈴ノ木遺跡（秦野市）	SS01（土器集中）	ⅢE3	Ⅲ	e	かながわ考古学財団 1999
新潟県					
正尺A遺跡（新潟市：旧豊栄市）		ⅢF2	Ⅲ	F	新潟県教委 2001

正尺A遺跡（新潟市：旧豊栄市）		Ⅱ D3	Ⅱ	欠損	同上
正尺A遺跡（新潟市：旧豊栄市）		Ⅱ D3	Ⅱ	欠損	同上
正尺A遺跡（新潟市：旧豊栄市）		Ⅲ E	欠損	E	同上
緒立C遺跡（新潟市：旧黒崎町）	SX94A周辺	Ⅲ E	欠損	E	黒崎町教委 1979
緒立C遺跡（新潟市：旧黒崎町）	包含層	Ⅲ E2	欠損	E	同上
緒立C遺跡（新潟市：旧黒崎町）	包含層		欠損	E	同上
御井戸遺跡（新潟市：旧巻町）		Ⅲ F2	Ⅲ	F	巻町教委 2004
御井戸遺跡（新潟市：旧巻町）		Ⅱ D2	Ⅱ	欠損	同上
御井戸遺跡（新潟市：旧巻町）		Ⅲ D1	欠損	C	同上
南赤坂遺跡（新潟市：旧巻町）	遺構外出土	Ⅲ D3	Ⅲ	C	巻町教委 2002
緒立遺跡（新潟市：旧黒崎町）	B' 区	Ⅲ D3	欠損	C	黒崎町教委 1979
的場遺跡（新潟市）	包含層	Ⅱ D2	Ⅱ	欠損	新潟市 1993
西川内南遺跡（胎内市：旧中条町）	SD1218	Ⅱ D2	Ⅱ	D	新潟県教委 2005
西川内南遺跡（胎内市：旧中条町）	SD1218	Ⅲ E1	欠損	E	同上
西川内南遺跡（胎内市：旧中条町）	SD1218	Ⅲ E	欠損	E	同上
西川内南遺跡（胎内市：旧中条町）	SK1007	Ⅱ D3	Ⅱ	D	同上
西川内南遺跡（胎内市：旧中条町）	SK1045	Ⅲ D	欠損	C	同上
西川内南遺跡（胎内市：旧中条町）	SK1045	Ⅲ D2	欠損	C	同上
西川内南遺跡（胎内市：旧中条町）	SK1216	Ⅲ D2	欠損	C	同上
西川内南遺跡（胎内市：旧中条町）	SD1220	Ⅲ F	Ⅲ	F	同上
西川内南遺跡（胎内市：旧中条町）	包含層	Ⅱ D3	Ⅱ	D	同上
西川内南遺跡（胎内市：旧中条町）	包含層	Ⅱ D3	Ⅱ	欠損	同上
大塚遺跡（胎内市：旧中条町）	グリッド	Ⅲ D2	Ⅲ	C	中条町教委 2002
下割遺跡（上越市）	SX1317	Ⅲ D2	Ⅲ	C	新潟県教委 2004
下割遺跡（上越市）	旧河川	Ⅲ D1	欠損	C	同上
下割遺跡（上越市）	旧河川		欠損	E	同上
一之口遺跡（上越市）	包含層	Ⅲ D	欠損	C	新潟県教委 1994
一之口遺跡（上越市）	包含層	Ⅳ F	Ⅳ	F	同上
新保遺跡（上越市：旧柿崎町）	包含層	Ⅱ C	欠損	C	新潟県教委 2001
道端遺跡（荒川町）	SI3	Ⅲ F3	Ⅲ	F	十日町市教委 2001
道端遺跡（荒川町）	SD003	Ⅲ F3	Ⅲ	F	同上
道端遺跡（荒川町）	SD027		欠損	欠損	同上
道端遺跡（荒川町）	SK212	Ⅲ E	欠損	E	同上
道端遺跡（荒川町）	河川跡		欠損	E	同上
山三賀Ⅱ遺跡（聖竜町）	A12(6) 区		欠損	F	新潟県教委 1989
二本松東山遺跡（聖籠町）	3号周溝墓	Ⅲ D	欠損	C	聖籠町教委 1993
野中土手付遺跡（新発田市：旧加治川村）		Ⅱ B1	Ⅱ	B	加治川村教委 2004
富山県					
打出遺跡（富山市）	SX1	Ⅲ F4	Ⅲ	F	富山市教委 2004・2007
打出遺跡（富山市）	SK17/18	Ⅲ F3	Ⅲ	F	同上
打出遺跡（富山市）	SK113	Ⅲ F3	欠損	F	同上
野田・平榎遺跡（富山市）	試掘	Ⅱ D2	Ⅱ	D	富山市教委 1996
富崎遺跡（富山市）	SX01	Ⅳ F4	欠損	F	富山市教委 2008
桜町遺跡（小矢部市）	試掘（1985）	Ⅲ F	欠損	F	小矢部市教委 2003
惣領野際遺跡（氷見市）	SD643	Ⅲ F	Ⅲ	F	富山県文化振興財団 2010
山梨県					
塩部遺跡（甲府市）	SY03	Ⅳ F2	Ⅳ	E	山梨県埋蔵文化財センター 1996
塩部遺跡（甲府市）	SY04	Ⅳ F2	Ⅳ	E	同上
榎田遺跡（甲府市）	第1号方形周溝墓	Ⅱ D2	Ⅱ	D	同上
榎田遺跡（甲府市）	遺構外出土	Ⅱ B2	Ⅱ	B	同上
久保田遺跡（甲府市）	遺構外出土	Ⅳ F	欠損	E	山梨県埋蔵文化財センター 2002

村前東A遺跡（南アルプス市：旧櫛形町）	6号溝	ⅣF	Ⅳ	E	山梨県埋蔵文化財センター 1997
村前東A遺跡（南アルプス市：旧櫛形町）	58号住居址	ⅣF3	Ⅳ	E	同上
村前東A遺跡（南アルプス市：旧櫛形町）	58号住居址	ⅣF3	Ⅳ	E	同上
村前東A遺跡（南アルプス市：旧櫛形町）	58号住居址	ⅣF3	Ⅳ	E	同上
坂井南遺跡（韮崎市）	11号住居址	ⅢF3	Ⅲ	F	韮崎市教委 1988
坂井南遺跡（韮崎市）	39号住居址	ⅣF3	Ⅳ	E	同上
坂井南遺跡（韮崎市）	41号住居址	ⅣF3	Ⅳ	E	同上
姥塚遺跡（笛吹市：旧御坂町）	85号住居址	ⅡB3	Ⅱ	B	山梨県埋蔵文化財センター 1987
長野県					
御屋敷遺跡（千曲市：旧上山田町）	H19号住居	ⅢD2	欠損	D	上山田町教委 1994
御屋敷遺跡（千曲市：旧上山田町）	H19号住居	ⅢE2	欠損	E	同上
御屋敷遺跡（千曲市：旧上山田町）	H19号住居	ⅣE	欠損	F	同上
御屋敷遺跡（千曲市：旧上山田町）	H19号住居	ⅢE2	欠損	E	同上
御屋敷遺跡（千曲市：旧上山田町）	H19号住居	ⅢD	欠損	D	同上
堀の内遺跡（松本市）		ⅢE2	Ⅲ	E	松本市教委 1992
向畑遺跡（松本市）	第66号住居址	ⅡB	欠損	B	松本市教委 1990
前田遺跡（御代田町）	H-61号住居址	ⅤF	Ⅴ	F	御代田町教委 1987
前田遺跡（御代田町）	H-75号住居址	ⅣF4	Ⅳ	F	同上
平出遺跡（塩尻市）	H-75号住居址	ⅡB	Ⅱ	欠損	塩尻市教委 1987
町川田遺跡（長野市）	042号址	ⅣE	Ⅳ	F	長野市教委 1988
岐阜県					
宮之脇遺跡（可児市：旧可児町）		ⅢE2	Ⅲ	E	可児郡可児町教委 1976
柿田遺跡（可児市：旧御嵩町）		ⅣF	欠損	F	岐阜県教育文化財団文化財保護センター 2005
城之内遺跡（岐阜市）		ⅡD2	Ⅱ	欠損	岐阜市教委 1990
静岡県					
長崎遺跡（静岡市：旧清水市）	5区台状遺構1群	ⅣF	Ⅳ	E	静岡県埋蔵文化財調査研究所 1995
長崎遺跡（静岡市：旧清水市）	5区台状遺構4群	ⅣF1	欠損	E	同上
長崎遺跡（静岡市：旧清水市）	SX551	ⅣF2	欠損	E	同上
源平山遺跡（三島市）	11号住居址	ⅢE	欠損	E	三島市教委 2000
源平山遺跡（三島市）	遺構外出土	ⅢE	欠損	E	同上
新堀遺跡（袋井市：旧浅羽町）	3・4区古墳時代土坑SF413	ⅢE	欠損	E	静岡県埋蔵文化財調査研究所 1993
三新田遺跡（富士市）	A区21号住居址	ⅣF	Ⅳ	E	富士市教委 1983
元島遺跡（磐田市：旧福田町）	包含層	ⅢF4	Ⅲ	F	静岡県埋蔵文化財調査研究所 1999
月の輪下遺跡（富士宮市）		ⅢE	Ⅲ	E	富士宮市教委 1981
大浦村東Ⅰ遺跡（浜松市）		ⅡB	Ⅱ	B	浜松市文化協会 2004
小深田遺跡（焼津市）	溝	ⅢE2	Ⅲ	E	焼津市教委 1982
愛知県					
朝日遺跡（名古屋市・西春日井郡）	63D区SD02	ⅢF4	Ⅲ	F	愛知県埋蔵文化財センター 1994
朝日遺跡（名古屋市・西春日井郡）	SDⅩⅤ・ⅩⅥ	ⅢE2	Ⅲ	E	同上
朝日遺跡（名古屋市・西春日井郡）		ⅣF4	Ⅳ	F	同上
三王山遺跡（名古屋市）	SK02・05	ⅢF4	Ⅲ	F	名古屋市教委 1999
惣作・鐘場遺跡（瀬戸市）	SB221	ⅣF	Ⅳ	F	愛知県埋蔵文化財センター 2008
瓜郷遺跡（豊橋市）	包含層	ⅢF1	Ⅲ	F	豊橋市教委 2007

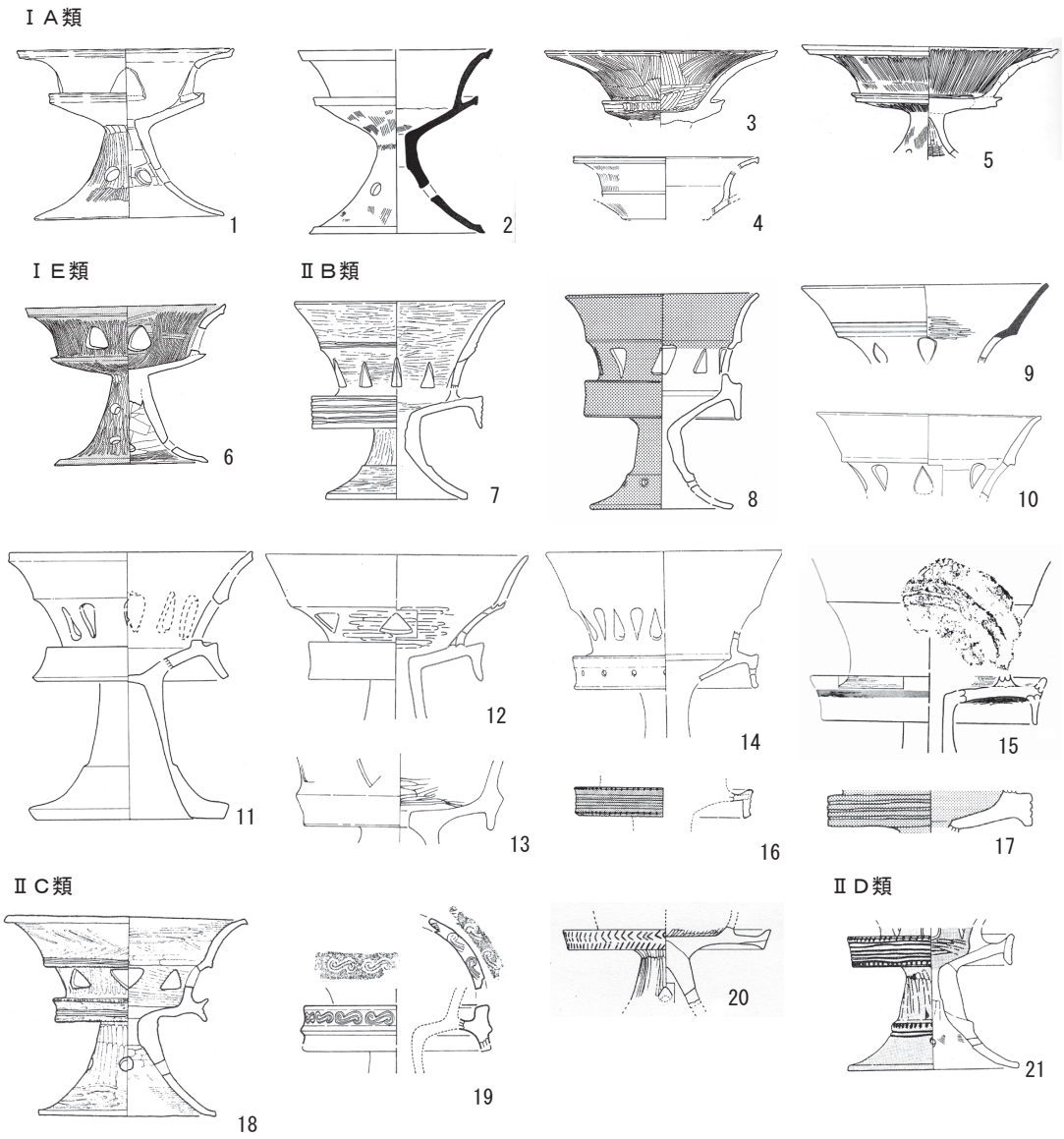


図７　高杯状装飾器台の分類①（S=1/6）

1：北島遺跡（熊谷市）　2：下淵名塚越遺跡（伊勢崎市）　3：一番割遺跡（柏市）　4：田中小遺跡（柏市）　5：小林八束１遺跡（菖蒲町）　6：辺田古墳群（市原市）　7：野中土手付遺跡（新発田市）　8：榎田遺跡（甲府市）9：平出遺跡（塩尻市）　10：城之内遺跡（岐阜市）　11：姥塚遺跡（笛吹市）　12：大浦村東Ⅰ遺跡（浜松市）　13：山王若宮遺跡（前橋市）　14：向田遺跡（松本市）　15：原遺跡（さいたま市、旧大宮市）　16：阿玉台北遺跡（香取市）　17：国府関遺跡群（茂原市）　18：雀宮（宇都宮市）　19：新保遺跡（上越市）　20：戸張一番割遺跡（柏市）　21：大崎台遺跡（佐倉市）

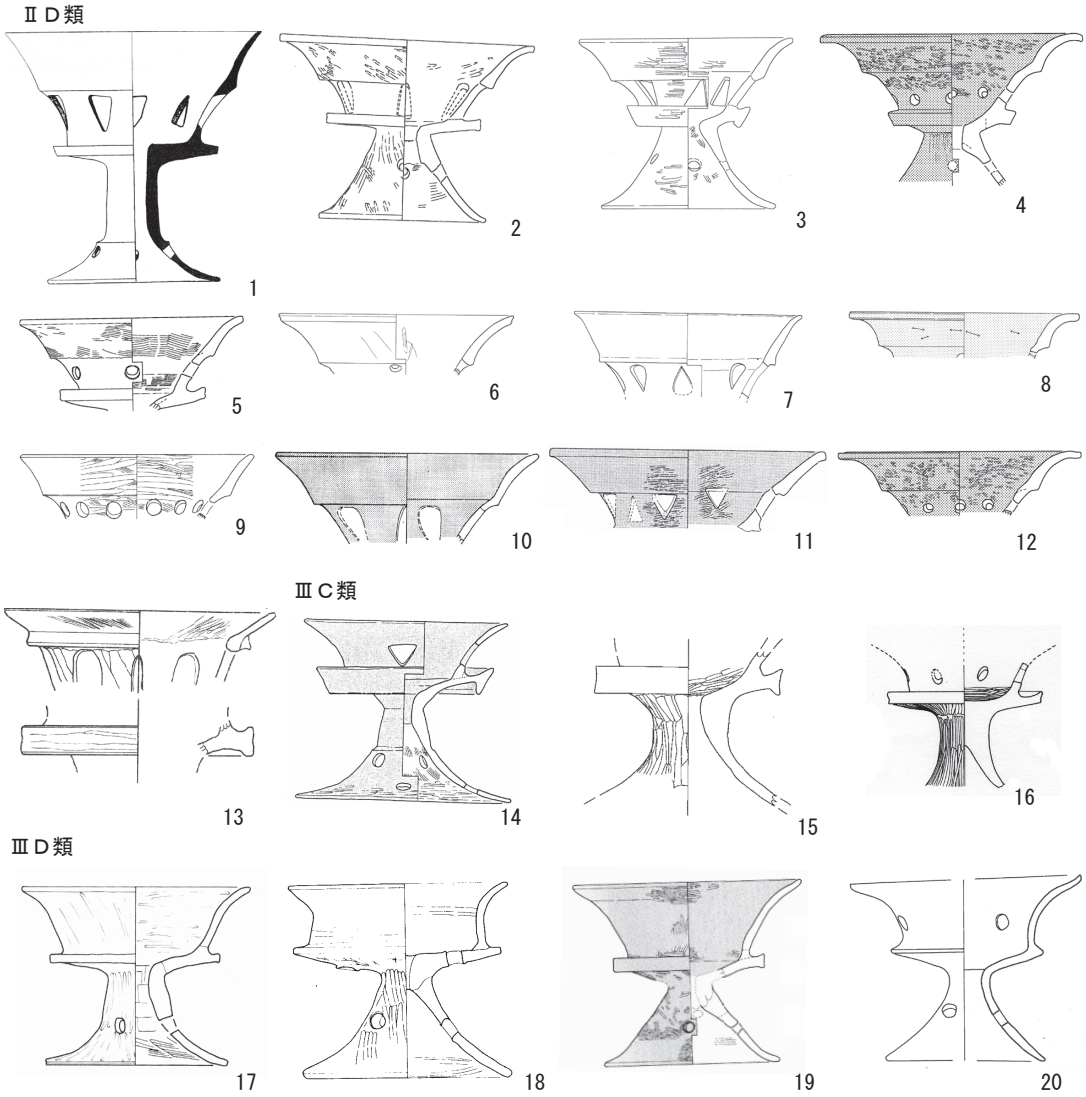


図８　高杯状装飾器台の分類②（S=1/6）

1：大堀遺跡（富津市）　2：西川内南遺跡（胎内市）（結城市）　3：野田・平榎遺跡（富山市）　4：西川内南遺跡（胎内市）　5：西川内南遺跡（胎内市）6：正尺Ａ遺跡（新潟市）　7：城之内遺跡（岐阜市）　8：正尺Ａ遺跡（新潟市）　9：国府関遺跡群（茂原市）　10：的場遺跡（新潟市）　11：御井戸遺跡（新潟市）　12：西川内南遺跡（胎内市）　13：緒立Ｃ遺跡（新潟市）　14：中耕遺跡（坂戸市）　15：長根遺跡（吉井町）　16：戸張一番割遺跡（柏市）　17：八幡原遺跡（高崎市）　18：南山遺跡（印西市）　19：南赤坂遺跡（新潟市）　20：善長寺遺跡（結城市）

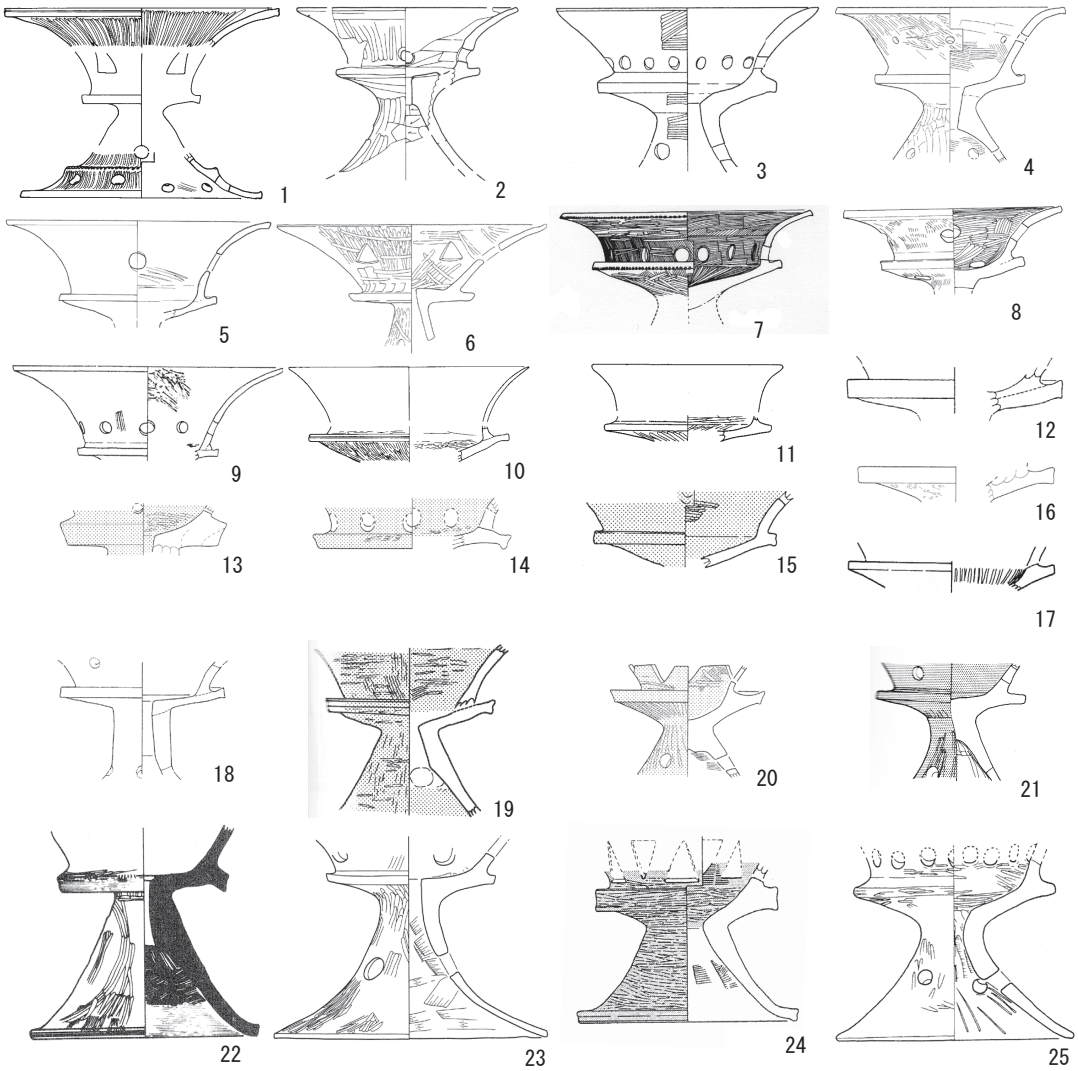


図９　高杯状装飾器台の分類③ (S=1/6)

1: 田中小遺跡（柏市）　2: 田中小遺跡（柏市）　3: 大塚遺跡（胎内市）　4: 下割遺跡（上越市）　5: 下佐野遺跡（高崎市）　6: 猿渕遺跡（大平町）　7: 戸張一番割遺跡（柏市）　8: 高崎情報団地遺跡（高崎市）　9: 元屋敷遺跡（浪江町）　10: 下野田稲荷原遺跡（さいたま市）　11: 反町遺跡（東松山市）　12: 御屋敷遺跡（千曲市、旧上山田町）　13: 西川内南遺跡（胎内市）　14: 西川内南遺跡（胎内市）　15: 二本松東山遺跡（聖籠町）　16: 西川内南遺跡（胎内市）　17: 小荷谷遺跡（横須賀市）　18: 御屋敷遺跡（千曲市）　19: 一之口遺跡（上越市）　20: 下割遺跡（上越市）　21: 小滝涼源寺（南房総市）　22: 緒立遺跡（新潟市）　23: 菅俣Ｂ遺跡（いわき市）　24: 御井戸遺跡（新潟市）　25: 畑田遺跡（鶴岡市）

Ⅲ E 類

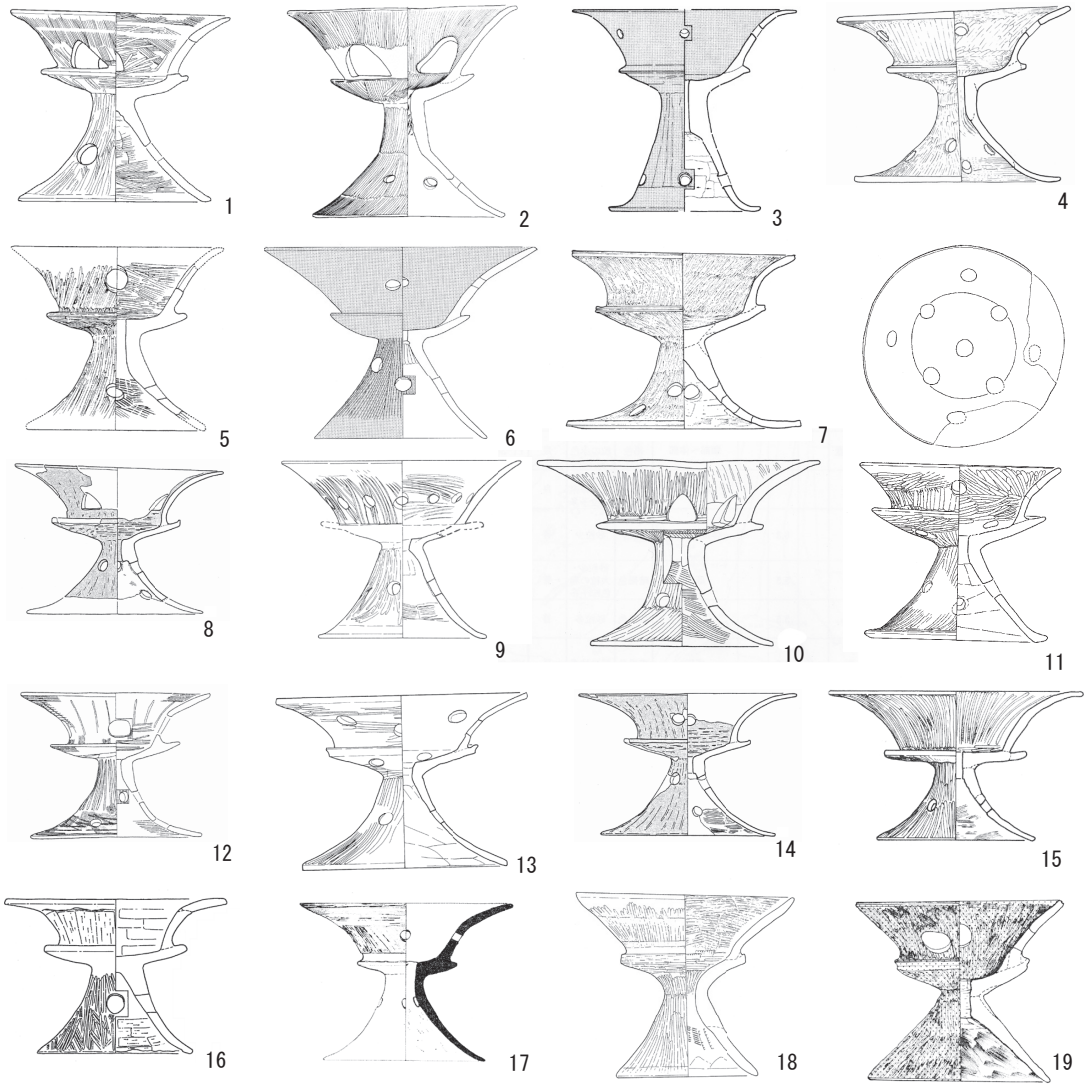


図 10　高杯状装飾器台の分類④ (S=1/6)

1: 上谷津第1遺跡（千葉市）　2: 稲荷台遺跡（上尾市）　3: 鷹ノ巣遺跡（ひたちなか市）　4: 小深田遺跡（焼津市）　5: 上小岩遺跡（江戸川区）　6: 広面遺跡（坂戸市）　7: 下道添遺跡（東松山市）　8: 中耕遺跡（坂戸市）　9: 下佐野遺跡（高崎市）　10: 寺下遺跡（横浜市）　11: 北島遺跡（熊谷市）　12: 鷹ノ巣遺跡（ひたちなか市）　13: 高崎情報団地遺跡（高崎市）　14: 中耕遺跡（坂戸市）　15: 豊島馬場遺跡（北区）　16: 八剣遺跡（壬生町）　17: 宮之脇遺跡（可児市）　18: 八剣遺跡（壬生町）　19: 下道添遺跡（東松山市）

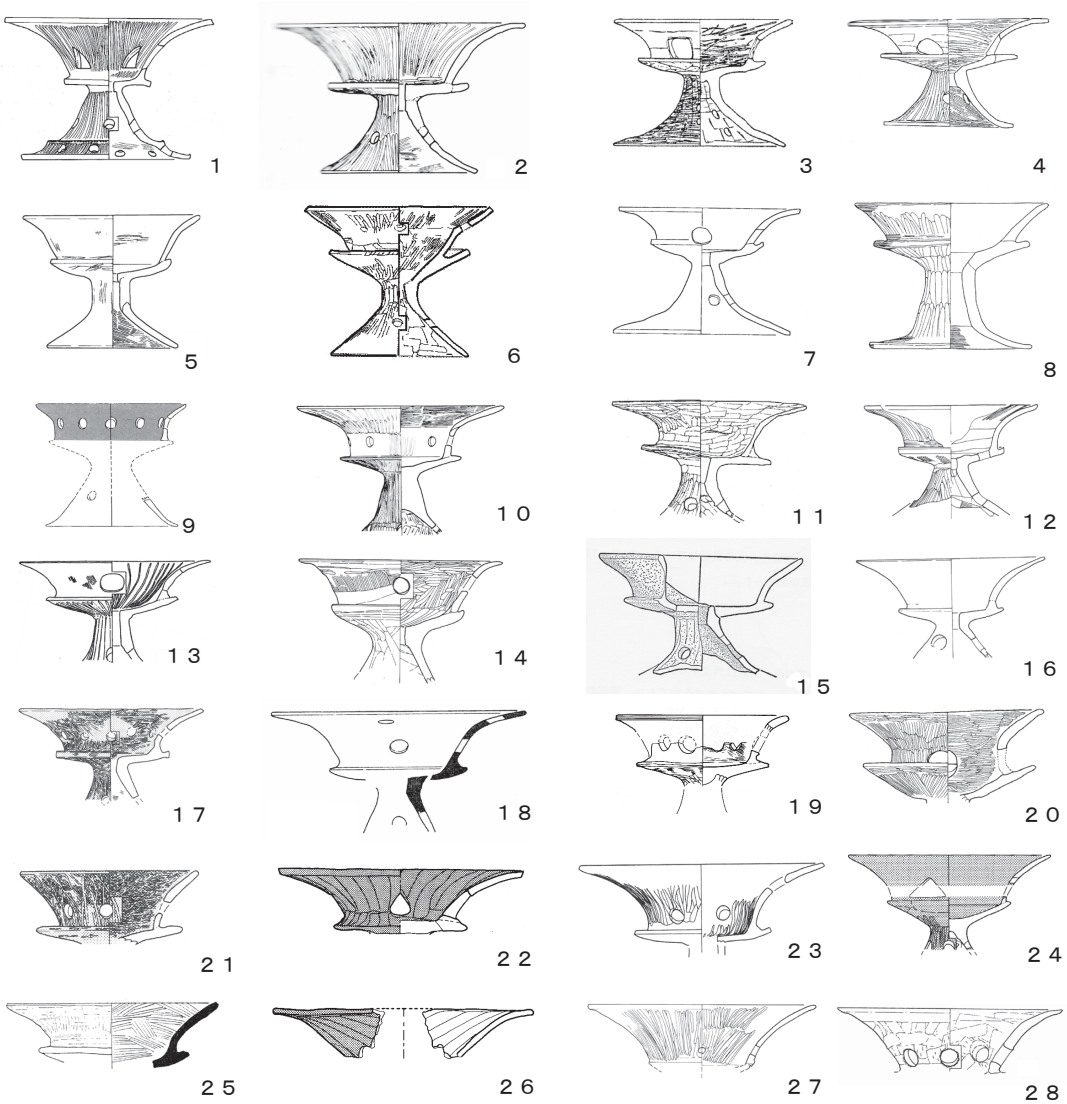


図 11　高杯状装飾器台の分類⑤ (S=1/6)

1: 田中小遺跡（柏市） 2: 豊島馬場遺跡（北区） 3: 八幡原遺跡（北区） 4: 根田代遺跡（市原市） 5: 荒砥前原遺跡（前橋市） 6: 岩井出口遺跡（柏市） 7: 篭田遺跡（東松山市） 8: 山前遺跡（遠田郡美里町） 9: 市野谷宮尻遺跡（流山市） 10: 朝日遺跡（名古屋市・西春日井郡） 11: 姥ヶ沢遺跡（江南町） 12: 新保田中村前遺跡（高崎市） 13: 烏森遺跡（下野市） 14: 唐桶田遺跡（太田市） 15: 葛西城址（葛飾区） 16: 豊島馬場遺跡（北区） 17: 寺野東遺跡（小山市） 18: 堀の内遺跡（太田市） 19: 西原遺跡（袖ヶ浦市） 20: 宮前遺跡（所沢市） 21: 寺野東遺跡（小山市） 22: 尾畑台遺跡（袖ヶ浦市） 23: 長根遺跡（吉井町） 24: 南羽鳥タダメキ第 2 遺跡（成田市） 25: 下道添遺跡（東松山市） 26: 尾畑台遺跡（袖ヶ浦市） 27: 下佐野遺跡（高崎市） 28: 八剣遺跡（壬生町）

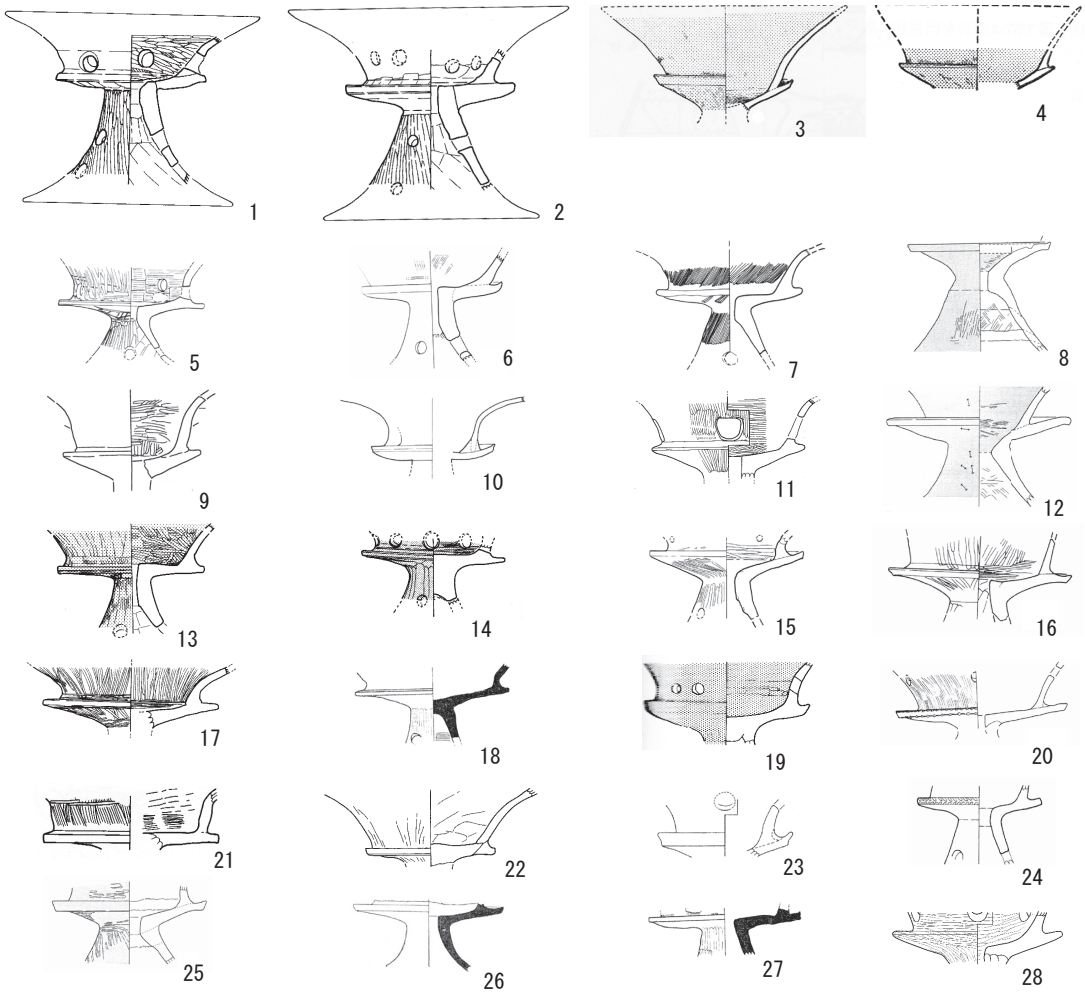


図 12　高杯状装飾器台の分類⑥ (S=1/6)

1: 久下前 A1 遺跡（本庄市） 2: 久下前 A1 遺跡（本庄市） 3: 長井町内原遺跡（横須賀市） 4: 長井町内原遺跡（横須賀市） 5: 六供中京安寺遺跡（前橋市） 6: 新堀遺跡（袋井市） 7: 下佐野遺跡（高崎市） 8: 緒立 C 遺跡（新潟市） 9: 仲居町一丁目遺跡（高崎市） 10: 月の輪下遺跡（富士宮市） 11: 市野谷宮尻遺跡（流山市） 12: 緒立 C 遺跡（新潟市） 13: 常代遺跡（君津市） 14: うならすず遺跡（千葉市） 15: 高崎情報団地遺跡（高崎市） 16: 一本杉Ⅱ遺跡（太田市） 17: 草刈遺跡（市原市） 18: 諏訪山遺跡（さいたま市） 19: 小滝涼源寺（南房総市） 20: 鍛冶谷・新田口遺跡（戸田市） 21: 一番割遺跡（柏市） 22: キサキ（成田市） 23: 御屋敷遺跡（千曲市） 24: 源平山遺跡（三島市） 25: 道端遺跡（荒川町） 26: 四条前遺跡（柏市） 27: 諏訪山遺跡（さいたま市） 28: 呼塚遺跡（柏市）

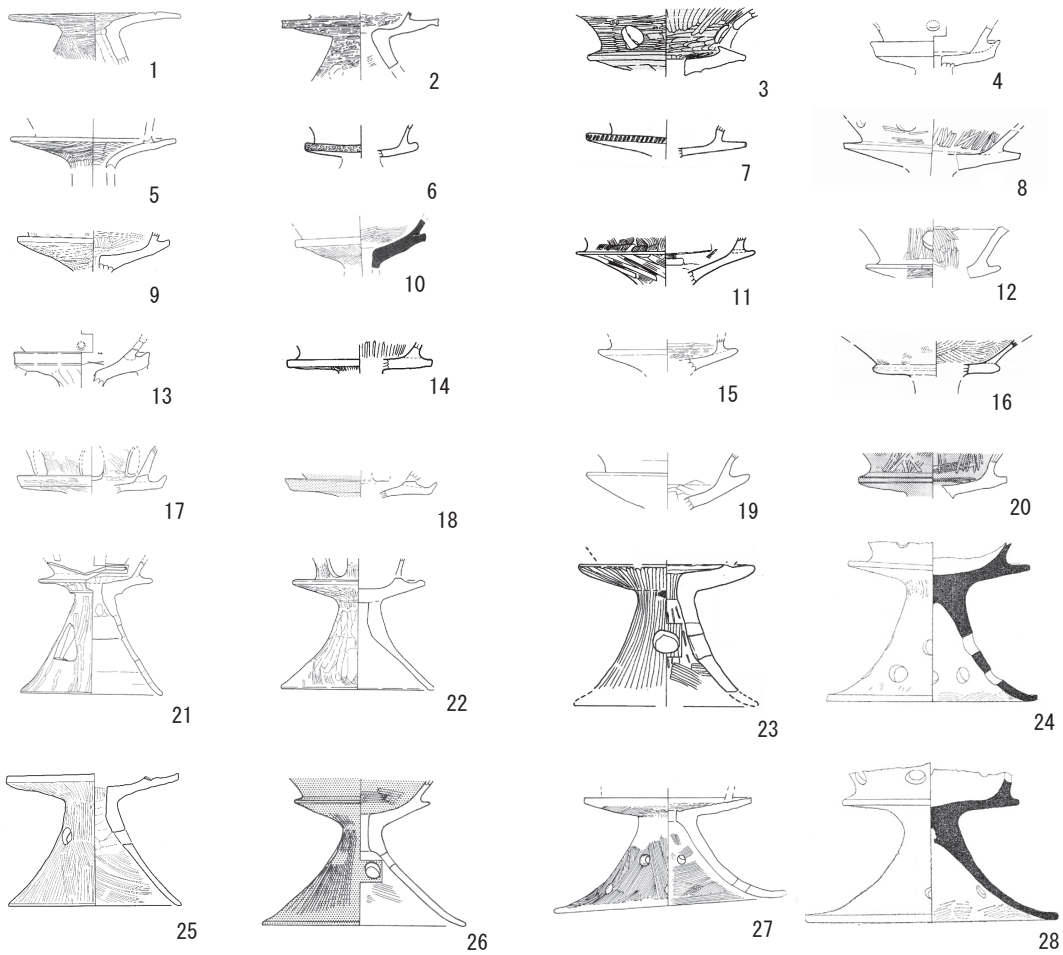


図 13　高杯状装飾器台の分類⑦ (S=1/6)

1: 道端遺跡（荒川町）　2: 寺野東遺跡（小山市）　3: 反町遺跡（東松山市）　4: 御屋敷遺跡（千曲市）　5: 中山 B 遺跡（前橋市）　6: 源平山遺跡（三島市）　7: 泉北側第 2 遺跡（印西市）　8: 高崎情報団地遺跡（高崎市）　9: 呼塚遺跡（柏市）　10: 下淵名塚越遺跡（伊勢崎市）　11: 上大城遺跡（袖ヶ浦市）　12: 内堀遺跡（前橋市）　13: 緒立 C 遺跡（新潟市）　14: 柏口遺跡（柏市）　15: 八剣遺跡（壬生町）　16: 鈴ノ木遺跡（秦野市）　17: 西川内南遺跡（胎内市）　18: 西川内南遺跡（胎内市）　19: 畑田遺跡（鶴岡市）　20: 府関遺跡群（茂原市）　21: 糸井宮前遺跡（昭和村）　22: 下割遺跡（上越市）　23: 原東遺跡（壬生町）　24: 四条前遺跡（柏市）　25: 呼塚遺跡（柏市）　26: ニガサワ遺跡（水戸市）　27: 堤東遺跡（前橋市）　28: 四条前遺跡（柏市）

ⅢＦ類

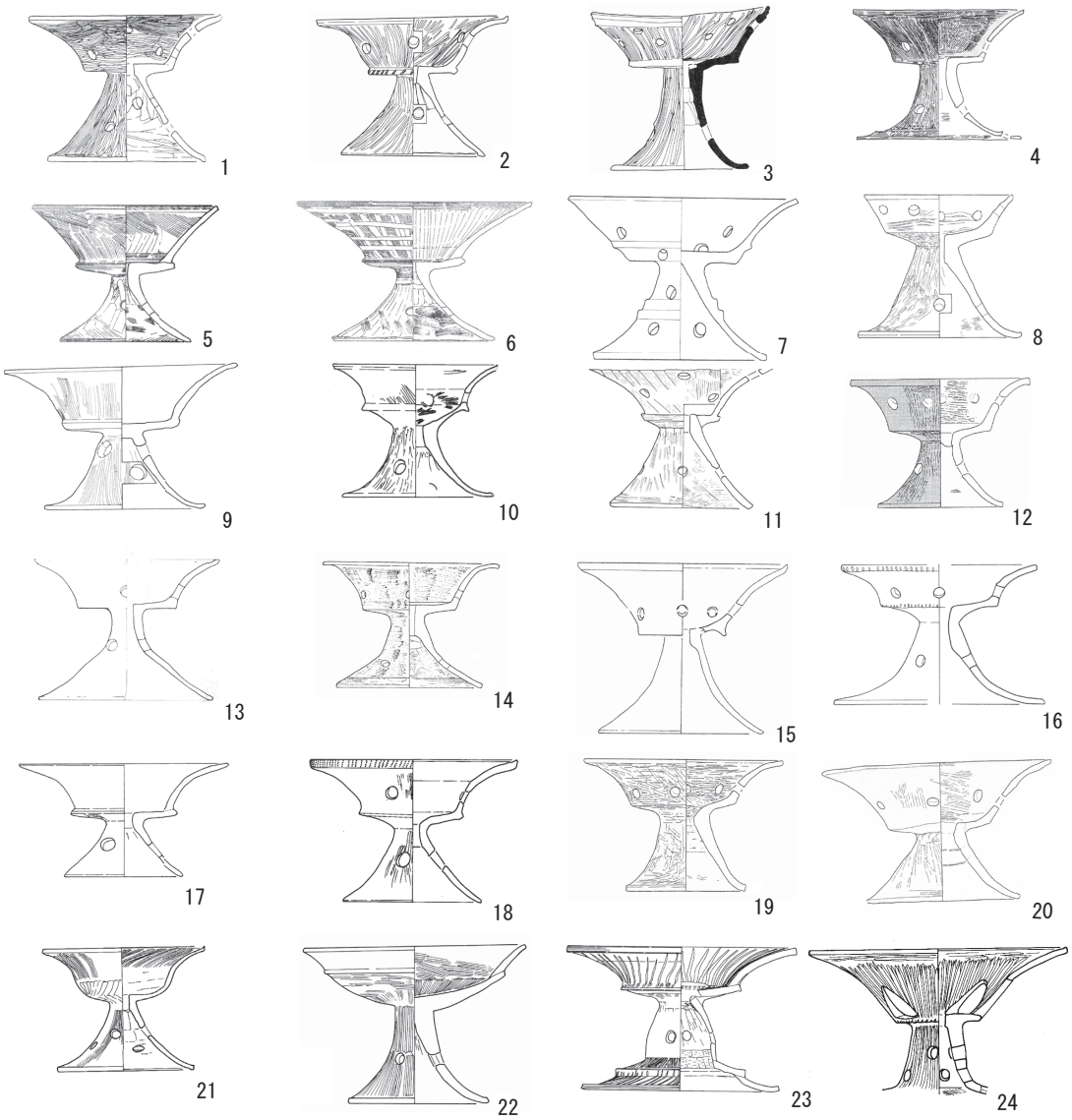


図 14　高杯状装飾器台の分類⑧ (S=1/6)

1: 村主遺跡（前橋市）　2: 東原Ｂ遺跡（前橋市）　3: 白倉下原・天引向原遺跡（甘楽町）　4: 寺野東遺跡（小山市）　5: 木滝台遺跡（鹿島町）　6: 木滝台遺跡（鹿島町）　7: 瓜郷遺跡（豊橋市）　8: 打出遺跡（富山市）　9: 元島遺跡（磐田市）　10: 阿曽岡・権現堂遺跡（富岡市）　11: 下境Ｉ遺跡（前橋市）　12: 御井戸遺跡（新潟市）　13: 下佐野遺跡（高崎市）　14: 平賀遺跡（印旛村）　15: 坂井南遺跡（韮崎市）　16: 市森戸遺跡（那珂市）　17: 豊島馬場遺跡（北区）　18: 小敷田遺跡（行田市）　19: 道端遺跡（荒川町）　20: 道端遺跡（荒川町）　21: 薬師入遺跡（阿見町）　22: 朝日遺跡（名古屋市）　23: 小荷谷遺跡（横須賀市）　24: 田中小遺跡（柏市）

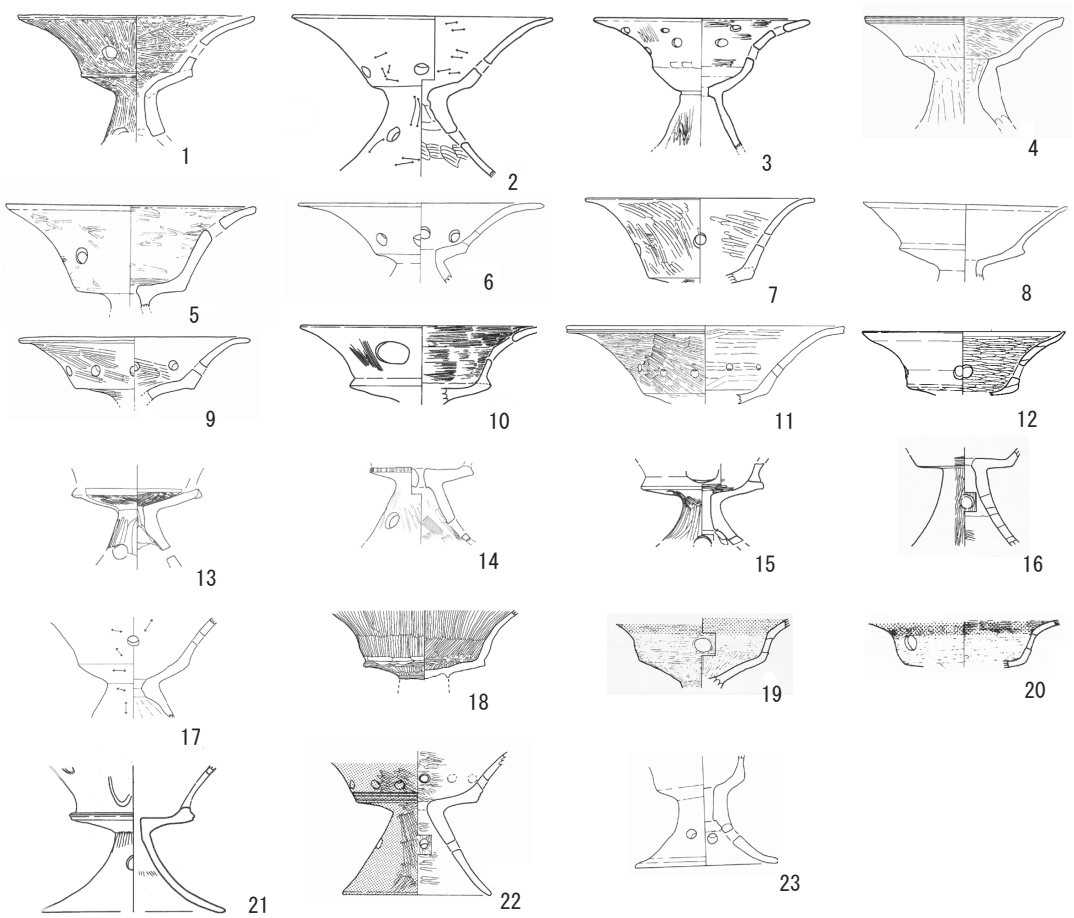


図 15　高杯状装飾器台の分類⑨ (S=1/6)

1: 寺野東遺跡（小山市） 2: 正尺 A 遺跡（新潟市） 3: 横俵遺跡（前橋市） 4: 打出遺跡（富山市） 5: 横俵遺跡（前橋市） 6: 村前東 A 遺跡（南アルプス市） 7: 正尺 A 遺跡（新潟市） 8: 三王山遺跡（名古屋市） 9: 畑田遺跡（鶴岡市） 10: 稲荷台遺跡（上尾市） 11: 惣領野際遺跡（氷見市） 12: 久下前 1 遺跡（本庄市） 13: 荒砥上ノ坊遺跡（前橋市） 14: 新保遺跡（高崎市） 15: 倉賀野万福寺Ⅱ遺跡（高崎市） 16: 坂井南遺跡（韮崎市） 17: 山三賀Ⅱ遺跡（聖竜町） 18: 前野兎谷遺跡（板橋区） 19: 池子遺跡群（逗子市） 20: 池子遺跡群（逗子市） 21: 小田林遺跡（結城市） 22: 打出遺跡（富山市） 23: 鍛冶谷・新田口遺跡（戸田市）

Ⅳ E 類

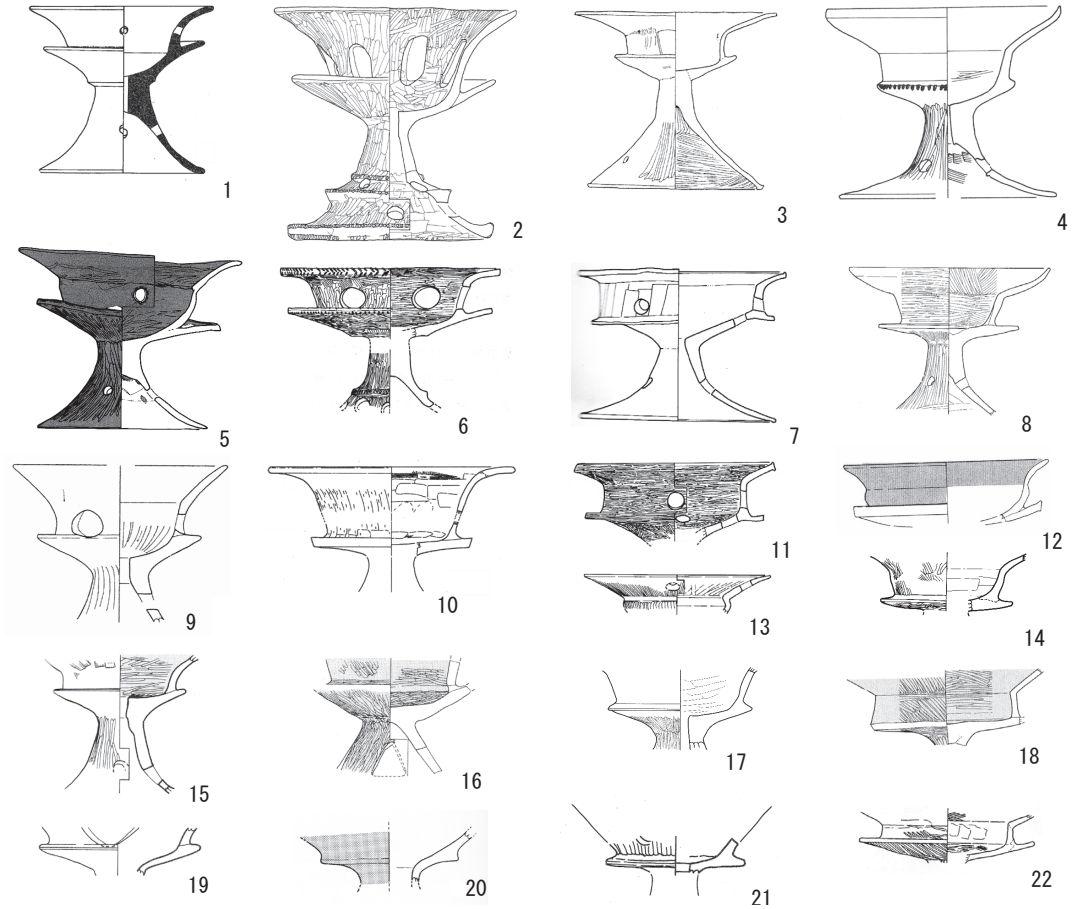


図 16　高杯状装飾器台の分類⑩ (S=1/6)

1: 上谷本第 2 遺跡（横浜市）　2: 原町東遺跡（文京区）　3: 薬師寺南（河内町）　4: 戸崎中山遺跡（かすみがうら市）　5: 上大城遺跡（袖ヶ浦市）　6: 平賀遺跡（印旛村）　7: 泉北側第 2 遺跡（印西市）　8: 南中台遺跡（市原市）　9: 沖餅遺跡（竜ヶ崎市）　10: 八剣遺跡（壬生町）　11: 泉北側第 2 遺跡（印西市）　12: 鍛冶谷・新田口遺跡（戸田市）　13: 塩谷平氏ノ宮遺跡（本庄市）　14: 常代遺跡（君津市）　15: 戸崎中山遺跡（かすみがうら市）　16: 平山遺跡（日野市）　17: 呼塚遺跡（柏市）　18: 南中台遺跡（市原市）　19: 森戸遺跡（那珂市）　20: 三枚町遺跡（横浜市）　21: 屋代 A 遺跡（竜ヶ崎市）　22: 一番割遺跡（柏市）

Ⅳ F 類

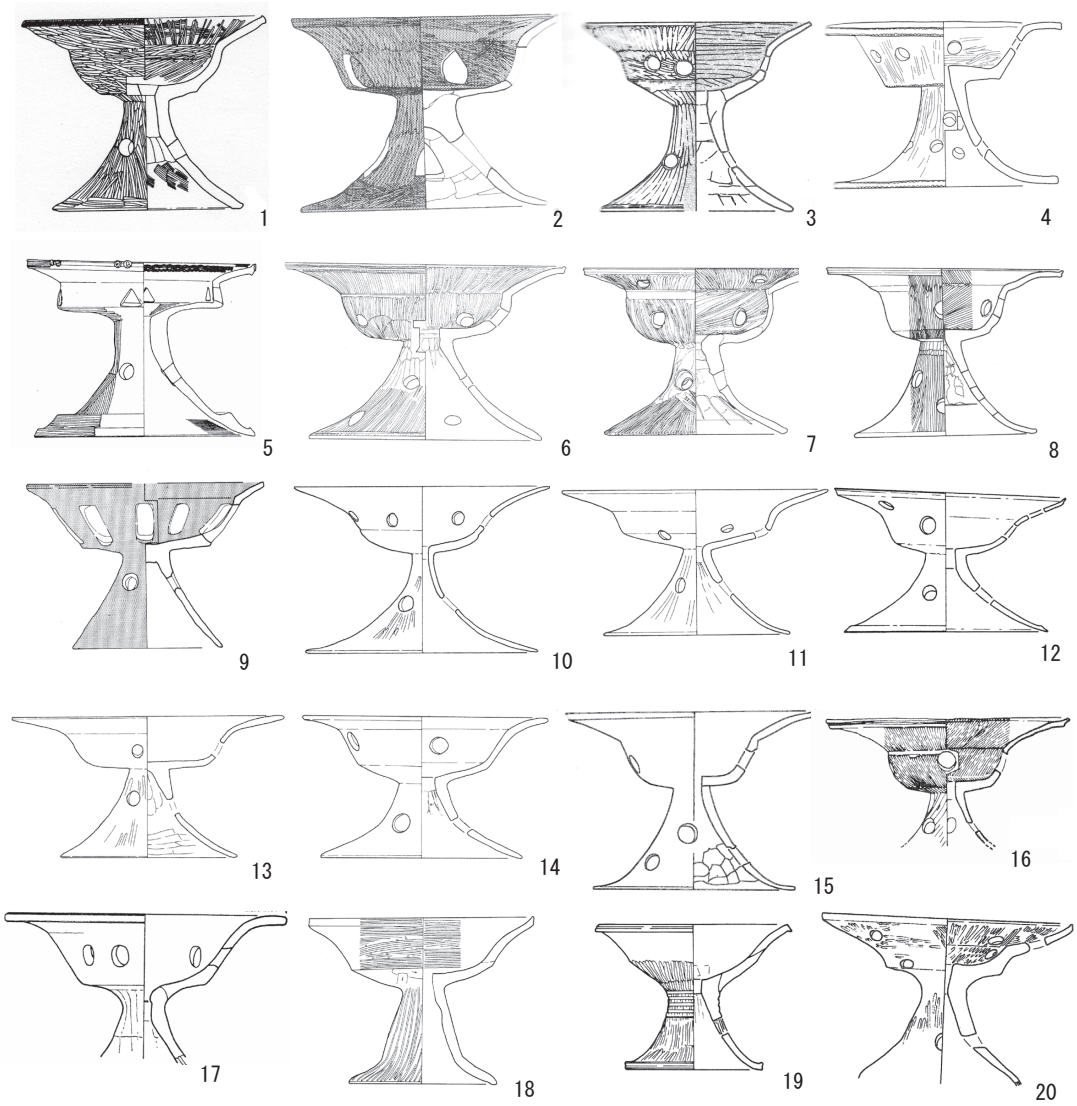


図 17　高杯状装飾器台の分類⑪ (S=1/6)

1: 戸張一番割遺跡（柏市） 2: 西原遺跡（甘楽町） 3: 薬師入遺跡（阿見町） 4: 薬師入遺跡（阿見町） 5: 大崎台遺跡（佐倉市） 6: 塩部遺跡（甲府市） 7: 荒砥北原遺跡（前橋市） 8: なすな原遺跡（横浜市） 9: 屋代 A 遺跡（竜ヶ崎市） 10: 村前東 A 遺跡（南アルプス市、旧櫛形町） 11: 村前東 A 遺跡（南アルプス市） 12: 坂井南遺跡（韮崎市） 13: 村前東 A 遺跡（南アルプス市） 14: 鍛冶谷・新田口遺跡（戸田市） 15: 塩部遺跡（甲府市） 16: 久下前 A1 遺跡（本庄市） 17: 町川田遺跡（長野市） 18: 前田遺跡（御代田町） 19: 朝日遺跡（名古屋市・西春日井郡） 20: 村前東 A 遺跡（南アルプス市）

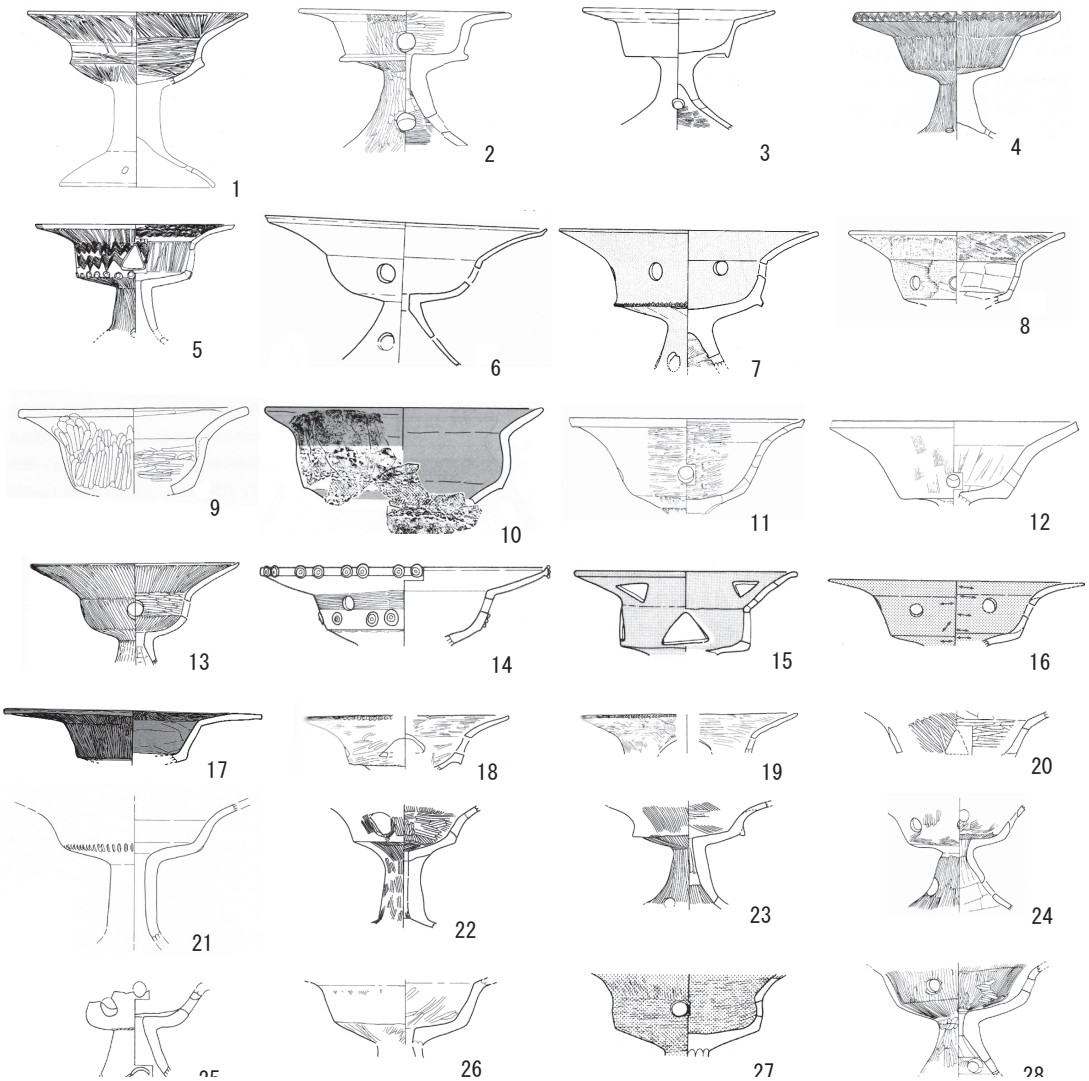


図 18　高杯状装飾器台の分⑫ (S=1/6)

1: 多摩ニュータウン遺跡（多摩市）　2: 内堀遺跡（前橋市）　3: 馬ノ口遺跡（千葉市）　4:No.86 根岸 B 遺跡（平塚市）　5: 山王台遺跡（袖ヶ浦市）　6: 坂井南遺跡（韮崎市）　7: 草刈遺跡（市原市）　8: 平賀遺跡（印旛村）　9: 御所ヶ谷遺跡（平塚市）　10: 北川貝塚（横浜市）　11: 中西遺跡（会津坂下町）　12: 中西遺跡（会津坂下町）　13: 三新田遺跡（富士市）　14: 草刈遺跡（市原市）　15: 城の越遺跡（千葉市）　16: 一之口遺跡（上越市）　17: 上大城遺跡（袖ヶ浦市）　18: 薬師入遺跡（阿見町）　19: 薬師入遺跡（阿見町）　20: 北島遺跡（熊谷市）　21: 間門遺跡（鎌倉市）　22・23: 長崎遺跡（静岡市）　24: 小敷田遺跡（行田市）　25: 久保田遺跡（甲府市）　26: 高崎情報団地遺跡（高崎市）　27: 池子遺跡群（逗子市）　28: 長崎遺跡（静岡市）

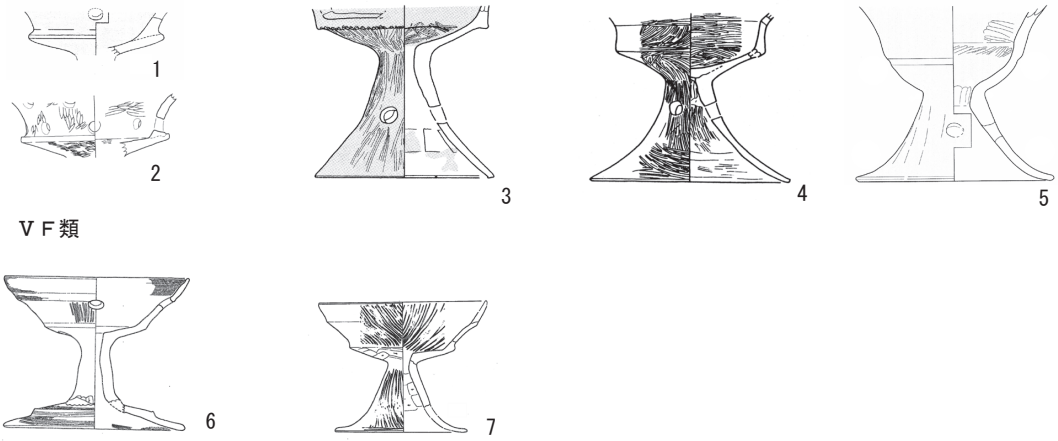


図 19　高杯状装飾器台の分類⑬ (S=1/6)

1: 御屋敷遺跡（千曲市）　2: 柿田遺跡（可児市）　3: 薬師入遺跡（阿見町）　4: 新羽南古墳（横浜市）　5: 富崎遺跡（富山市）　6: 南小泉遺跡（仙台市）　7: 前田遺跡（御代田町）